

古城山城跡

—やまなしの歴史文化公園整備活用事業に伴う
夢窓国師母の墓・御屋敷遺跡・古城山城跡発掘調査報告書—

2016年3月

市川三郷町教育委員会
公益財団法人山梨文化財研究所

古城山城跡

—やまなしの歴史文化公園整備活用事業に伴う
夢窓国師母の墓・御屋敷遺跡・古城山城跡発掘調査報告書—

2016年3月

市川三郷町教育委員会
公益財団法人山梨文化財研究所

序

本書は、やまなしの歴史文化公園整備活用事業にともなう夢窓国師母の墓・御屋敷遺跡・古城山城跡の試掘調査に関する報告書です。調査地の平塩の岡周辺は、源義清による甲斐源氏発祥の地として古い歴史のある地域です。

調査では戦国時代の近世陶器数点等が検出されました。周辺地域では遺構の発見は少なく、発掘調査事例も多くないことから、いずれも貴重な資料となりました。

最後になりますが、調査を担当していただきました公益財団法人山梨文化財研究所の皆様をはじめ関係各位に心から感謝申しあげ、序といたします。

平成28年3月18日

市川三郷町教育委員会

教育長 佐藤 紀征

例 言

- 本書は昭和63年（1988年）および平成2年（1990）に発掘調査が行われた山梨県市川三郷町（旧市川大門町）所在の夢窓国師母の墓および御屋敷遺跡、古城山城跡の3地点における発掘調査報告書である。夢窓国師母の墓は市川三郷町市川大門字西平塩、御屋敷遺跡は同市川大門字御屋敷、古城山城跡は同市川大門字別荘に位置する。
- 調査はやまなしの歴史文化公園「甲斐源氏の里公園整備事業」に伴う学術調査として、昭和63年に財団法人山梨文化財研究所が市川大門町教育委員会より委託を受けて実施した。また整理報告書作成業務は平成27年に公益財団法人山梨文化財研究所が市川三郷町教育委員会より委託を受けて実施した。
- 「古城山城跡」の名称については、「古城山の砦」「古城山城址」「古城山城跡」等があり、これまでの報告や会議資料を引用する場合、そのまま記載するが、本書遺跡名としては山梨県遺跡台帳記載名の「古城山城跡」とする。また旧市川大門町から古城山経由で四尾連湖を抜け城ヶ岳、本栖方面に至る山道については、「城山道」「山嶺道（さんじょうどう）」との記載例があるものの、とくに定まった名称がないことから、本書では「四尾連（しげれ）道」と仮称する。
- 発掘調査が行われてから四半世紀が経過した。この間、旧市川大門町は合併によって市川三郷町となり、当時の担当者は退職し、書類が保管されていないなど、これまでの経緯、発掘調査当時の

言

諸記録が十分に明らかにできなかった。とくに発掘調査に参加された方々の名前を明記できていない点はお詫び申し上げる次第である。

- 第5章第8節については山下孝司に執筆いただいた。その他原稿執筆、編集は鶴原功一が行った。
- 本書に関わる出土品、写真・図面等の記録類は、報告書刊行後に市川三郷町教育委員会で保管する予定である。
- 古城山城跡より出土した鉄釘に関しては、公益財団法人山梨文化財研究所の保存修復研究室で保存修復を実施した。
- 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順任意、敬称略）。なお前記したように調査参加者、協力者名については、調査から本報告書刊行までの経緯の中で明らかにできなかったこと、委員や調査参加者には既に故人となられた方があるが本書では明記していない点などお詫びする次第である。
青木淳・長田正和（市川三郷町教育委員会）、鈴木稔・中山千恵（公益財団法人山梨文化財研究所）、堀内真（山梨県立博物館）、深沢広太（身延町教育委員会）、佐々木満（甲府市教育委員会）、山下孝司（韮崎市教育委員会）、森谷忠（株式会社テクノプランニング）、広瀬千江美、中島一成、末創一、白鳥伸和、小林森男、堀内秀樹（東京大学）

凡 例

- 各遺構平面図中の北を示す方位はすべて磁北であり、補正をしていない。
- 遺構および遺物の縮尺は任意である。
- 本書使用の第1図は国土地理院発行1/50,000地形図「甲府」「身

延」「駿河」「富士山」、第2図は市川三郷町発行の1/2,500市川三郷町都市計画基本図、第3図は1/10,000市川三郷町全図を使用した。

目 次

序	第3章 夢窓国師母の墓地点	9	第2節 古城山烽火台跡に関する研究史	21
例 言	第1節 夢窓国師母の墓について	9	第3節 古城山城跡および周辺の	
凡 例	第2節 試掘調査の成果	12	調査方法	22
第1章 経 過	第4章 御屋敷遺跡	12	第4節 古城山城跡の遺構	22
第1節 調査の経過	第1節 平塩寺と義清館跡	12	第5節 古城山城跡の調査成果	30
第2節 発掘作業の経過	第2節 天正壬午の乱と御屋敷遺跡	14	第6節 城跡内の石造物	30
第3節 整理等作業の経過	第3節 地中レーダー探査報告	15	第7節 古城山烽火台跡の構造	33
第2章 遺跡の位置と環境	第4節 試掘調査の経緯と成果	17	第8節 古城山城跡の縄張	33
第1節 地理的環境	第5章 古城山城跡とその周辺	18	第6章 総 括	35
第2節 歴史的環境	第1節 古城山城跡の研究史	18		

第1章 経過

第1節 調査の経過

市川大門町（現市川三郷町）では、「やまなしの歴史文化公園に関する条例」（山梨県条例）で指定を受けた歴史文化公園「甲斐源氏の里」整備活用事業に伴い、昭和63年度に古城山城跡、夢窓国師母の墓、平成2年に御屋敷遺跡の試掘調査を実施した。

「やまなしの歴史文化公園」設置の主旨としては「郷土の貴重な資産として県民が広く親しむとともに、後世に継承すべき歴史文化公園に関し必要な事項を定め、もって県民一人一人が愛し、誇り得るふるさと山梨を築くことを目的」（条例 第一条）として「建造物、遺跡その他の歴史的文化的資産が周囲の自然環境又は景観と一体をなして、山梨らしさを具現し、及び形成している地域」（第二条）を知事が指定するもので、「郷土の貴重な歴史的文化的資産や周囲の自然、景観をあらためて見直し、その良さ、すばらしさについての認識を深め、これを守り育て、後世に継承する」（山梨県ホームページより抜粋）ねらいがある。指定に際しては、市町村の指定調書の提出に基づいて県が指定し、公園整備のための補助金を県が半額負担するというもので、「甲斐源氏の里」指定は県下16番目の指定となった。

山梨県では昭和63年1月の市川大門町長名での「甲斐源氏の里」の調書提出を受け、以下のような指定区域と保全活用計画の概要を告示した（昭和63年5月10日付毎日新聞）。

指定地域の範囲は、東を芦川から娥ヶ岳までの三珠町境、北を芦川・笛吹川合流地点、市川大門町市街地、西を高田地区の一宮浅間神社から正体山、南を六郷町、下部町境の山保地域とする約2,000haの地域とする。この地域にある平塙の岡は、天台百坊と称された平塙寺や、甲斐源氏の祖刑部三郎義清館跡があったと伝えられる。また市川大門町内には代官所が置かれるなど政治、経済、文化の中心地として栄えた。また南への街道である河内路の旧道沿いには峠や集落境内に馬頭観音を祀った独特の石龕が多数残るほか、四尾連湖を経由して富士山へ通じる旧道には、戦国時代とみられる烽火台や砦跡が点在する。この歴史公園における歴史的資産としては青州堤押切刑場跡、八幡神社、青州文庫跡、市川大門所跡、神明社、甲斐源氏旧跡碑、熊野神社、正ノ木稻荷社（平塙寺跡）、金剛院坂（延命石）、夢窓国師母の墓、弓削神社（弓削塚）、一宮浅間神社、銅鏡がある。文化的資産としては流通寺のビャクシン、

弘法大師印石、古城山の砦、城山の烽火台、子安神社のリョウメンヒノキ、石龕群（帶那峠、割石峠ほか）、川渡り、祇園祭、摩利支天祭、道祖神祭があげられる。また自然景観としては平塙の岡（桜）、三川合流（笛吹川、釜無川、芦川）の景観、県立四尾連湖自然公園の景観がある。市川大門町では、昭和63・64年度で遊歩道、園地、休憩舎、解説板、トイレの整備を行い、それに伴い発掘調査、和紙や花火の伝統的技術保持者の認定などをを行う予定とされた。

昭和63年7月29日、第1回目の市川大門町遺跡学術調査委員会（調査会）が開催され、青沼隆三町長（当時）より委員の委嘱状交付がなされた。また古城山城跡・源義清館跡・平塙寺跡調査研究事業計画書が提示され、歴史文化公園に対する保存活用に向けた取り組みが検討されている。

提示された事業計画書の内容は以下のとおりである。

〈調査研究の目的〉

山梨県西八代郡市川大門町に所在している古城山の砦と烽火台は『甲斐国志』の記述からもうかがえるように河内地方における重要な拠点となった城郭の一つである。その位置は、旧河内領と甲府を結ぶちょうど接点にあり、また近くには郡内方面を結ぶ古道が走るなど軍事的要衝を占めている。

また、砦址及び烽火台址とも縄張りはよく戦国期の様相を伝えており、しかも保存状況も極めて良く、中世城郭史研究上貴重な遺跡と言える。しかし、具体的な形態、築造年代および築造者をめぐる諸問題は未解明な状態にあり、その追求は緊急な課題とされている。この砦の眼下にある市川大門町平塙岡は、甲斐武田氏の祖源義清が初めて土着したところといわれており、現在でも甲斐源氏発祥の地として伝えられている。しかし、その実態となるとやはり全く不明と言わざるを得ず、古代末以降の甲斐国の歴史を探る上で学術的研究の必要性が強く指摘されてきたところである。これは夢窓国師の伝承をもつ古刹平塙寺とのかかわりも考えなければならず、この地域一帯の総合的な調査研究が重要となっている。

今回の調査研究は、こうした古代から中世戦国期に至る市川大門町の歴史的諸課題を追求・解明することを目的とし、あわせて、この貴重な文化財を広く市民、県民に公開し、活用を図るために方途を探るものとする。

〈調査予定〉

第1次調査 昭和63年度 古城山城址発掘調査および整備活用

第2次調査 昭和64年度 平塩の岡一帯の館・古寺調査、正ノ木社・熊野神社一帯の整備・活用

〈市川大門町遺跡学術研究調査会委員、職名は当時〉

会長 青沼隆三（市川大門町町長）

副会長 今福光好（町議会議長）

村松 武（町教育委員会教育長）

磯貝正義（県立考古博物館館長）

参与 新津 健（県文化課文化財主事）

理事 佐藤八郎（県文化財保護審議会委員）

植松又次（山梨郷土研究会理事長）

清雲俊元（県文化財保護審議会委員）

田代 孝（山梨県考古学協会委員長）

秋山 敬（山梨郷土研究会理事）

八巻與志夫（山梨県考古学協会会員）

萩原三雄（山梨文化財研究所）

丹沢計富（町教育委員会委員長）

回木忠造（町文化財審議委員会委員長）

委員 酒井清（町教育委員会委員）

望月昭三（同）

佐野太郎（同）

立川実造（町文化財審議委員会委員）

青嶋長雄（同）

小林哲三（同）

山村友保（同）

赤池忠則（町歴史文化特別調査委員）

中込公雄（同）

中倉 茂（同）

大原光治（地権者）

大原良子（同）

一瀬善司郎（地元64区区長）

一瀬芳次（地元66区区長）

調査員 柳原功一（山梨文化財研究所）

事務局長 青柳章臣（町教育委員会次長）

事務局 高野宣三（町教育委員会）

村松輝雄（同）

〈古城山城址発掘調査計画書〉

日程 昭和63年8月3日～20日

目的（略）

調査の方法 本調査は、古城山城址の遺構確認調査とし、城址の一部を発掘調査する。

その他 調査成果については、町及び学識経験者等で構成される学際的な学術研究調査会での基礎的研究

資料とする。

また、四尾連湖等を含めた豊かな自然環境と数多くの歴史的遺産を調和させ、自然と歴史散策の自然の里公園として整備活用を図るための貴重な文化遺産に位置づける。

発掘調査計画書に基づき、7月26日～9月30日には夢窓国師母の墓、古城山城跡の調査が実施された。その後、11月8日に第2回遺跡学術研究調査会があり、発掘調査報告、今後の調査内容として平塩の岡の平塩寺及び義清館跡伝承地（御屋敷遺跡）の調査について検討が行われた。

平成元年（1989）3月22～28日には平塩の岡、御屋敷遺跡周辺で地中レーダー探査が行われ、3月30日（木）の第3回市川大門町遺跡学術研究調査会で地中レーダーの調査概要、今後の事業計画等が報告された。

その後、御屋敷地内では平成2年3月に地中レーダーの成果を受けて試掘調査が実施され、出土遺物の整理作業などが実施されたが、報告書については未刊のまま、今日に至ることとなった。

平成17年の三町合併で市川三郷町となったのち、平成27年にかつて旧市川大門町教育委員会が実施した遺跡調査について報告書を作成することとなり、改めて当時の調査資料や写真を再整理し、現地踏査、追加調査などが行われた。

第2節 発掘作業の経過

発掘調査に関する経過は以下の通りで、昭和63年7月26日～28日に夢窓国師母の墓、同年8月3日～9月30日に古城山城跡の調査（調査担当 柳原功一）が実施され、平成2年3月22日～28日に御屋敷遺跡の調査（調査担当 中山千恵）が実施されている。以下は調査日誌抄録である。

昭和63年（1988）7月26日（火）夢窓国師母の墓の調査初日。杭打ちを行い、1～3号トレントン設定。2号トレントンの平面図作成。

7月27日（水）2号トレントンのコンクリブロック下の掘り下げ、1号トレントンの埋戻しを行う。北隅を掘り下げ、層序を確認する。石碑の拓本作成。平面図作成。集石断ち割り。

7月28日（木）半日作業実施。本日にて夢窓国師母の墓地点の調査は終了とする。

8月3日（水）古城山城跡調査初日。挨拶ののち四尾連湖経由で器材を城跡内に運搬する。調査予定地内の下草・ヤブ払いを行う。

8月4日（木）下草・ヤブ払いの続きをを行い、杭打ちをする。1号トレンチ設定し、発掘開始。標高を城跡入口の三角点から調査区内の杭に移動する。

8月5日（金）1号トレンチ拡張。平面図作成開始。

8月8日（月）平面図作成。3号トレンチ設定、発掘調査。

8月9日（火）平面図作成。5号トレンチ設定、発掘調査。

8月18日（木）杭打ち。4号トレンチ設定、発掘調査。

8月19日（金）1号トレンチ再拡張、発掘調査。

8月23日（火）平面図作成。4号トレンチ拡張。

8月24日（水）平面図作成。1・2号土壘の断割りを行う。

8月25日（木）平面図作成。2号トレンチ拡張、発掘調査。

8月26日（金）平面図作成。2号トレンチの発掘調査。

8月29日（月）6号トレンチ設定、発掘調査。町長・町議会議員見学。Ⅲ郭付近の平面図作成、V郭北側豎堀付近のヤブ払いを行う。

8月30日（火）1・2号トレンチ平面図作成。遺物取り上げ。

8月31日（水）平面図作成。ヤブ払いを行う。

9月1日（木）1号堀付近の地形測量。

9月2日（金）平面図作成

9月7日（水）平面図作成、トレンチ実測。遺物の取り上げ。

9月8日（木）平面図作成終了。トレンチ実測。富士講碑の文字の読み取りなど。

9月9日（金）トレンチ実測。6・7号トレンチ断面実測。石造物の調査。

9月29日（木）1号土壘の断面実測。写真撮影を行い、

埋戻しを開始。

9月30日（金）烽火台要図作成。写真撮影および埋め戻しを終了する。荷造り、片付け、器材運搬を行い、本日にて作業終了。

平成元（1989）年3月13日（月）～16日（木）平塙の岡付近および御屋敷遺跡内における地中レーダー探査実施。

平成2年（1990）3月22日（木）～28日（水）御屋敷遺跡の試掘調査実施。

第3節 整理等作業の経過

昭和63年の古城山城跡の発掘調査および平成2年の御屋敷遺跡試掘調査ののち、出土遺物の水洗、注記については、財團法人山梨文化財研究所内でただちに作業を実施したが、本報告刊行が予定されていなかったため、遺物および記録類、写真類については山梨文化財研究所にて保管してきた。

平成27年（2015）6月、市川三郷町教育委員会より報告書刊行についての依頼が公益財團法人山梨文化財研究所にあり、平成27年6月1日～平成28年3月18日を期間とする「古城山城址遺跡等発掘調査報告書作成業務委託」を市川三郷町と公益財團法人山梨文化財研究所の間で締結した。

平成27年12月23日、古城山城跡から烽火台方面にかけて改めて踏査し、尾根上の石造物、堀切を新たに確認するとともに、古城山城跡内の現況を訪れたところ、郭内に建っていた木造の浅間社は朽ちて屋根だけとなり、富士講碑のいくつかは倒れて苦むすなど、四半世紀の時の流れを実感することとなった。出土遺物の実測や原稿、図版作成等を行いつつ、平成28年2月2日には夢窓国師母の墓の実測作業を行った。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

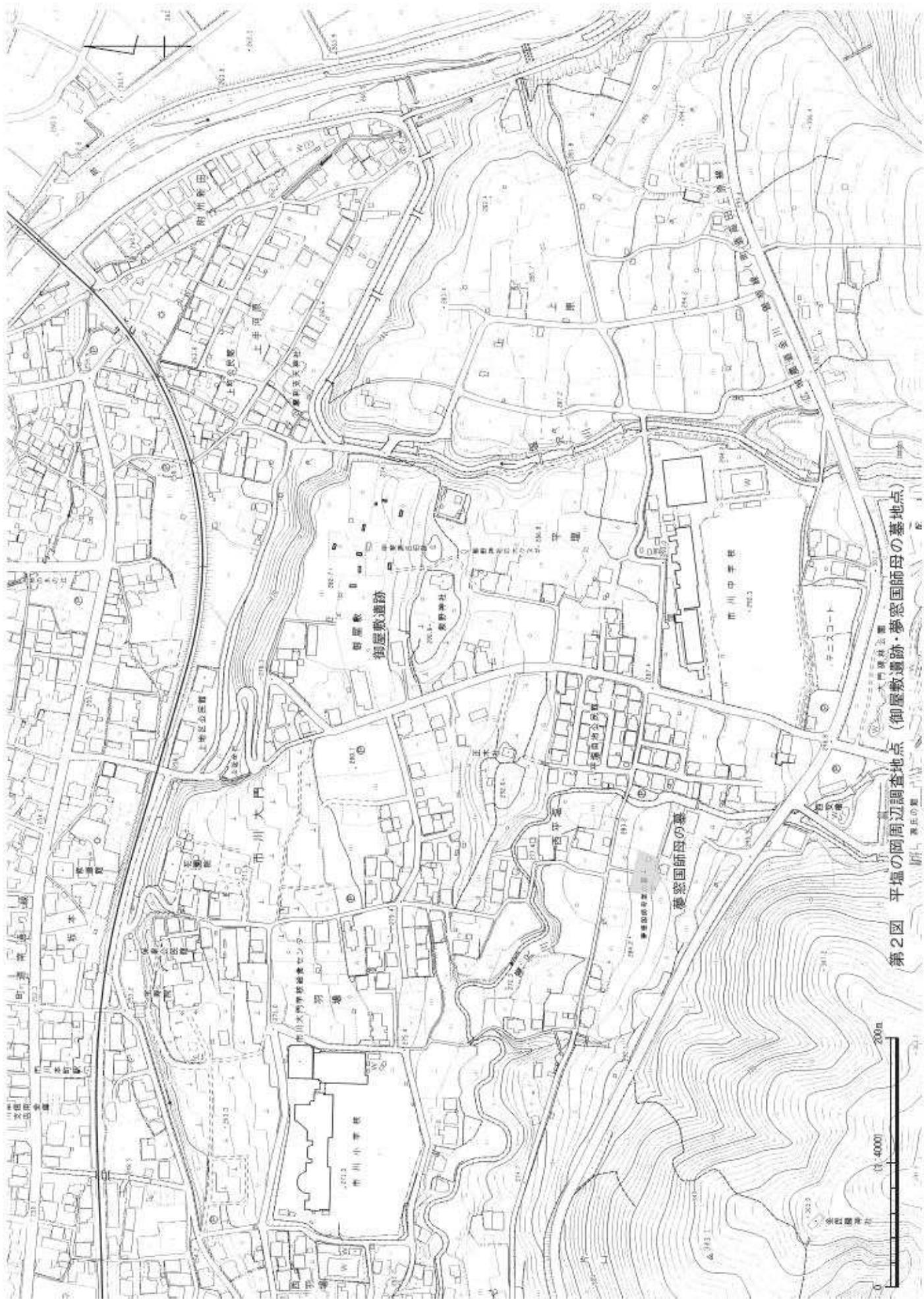
夢窓国師母の墓、御屋敷遺跡、古城山城跡が所在する市川三郷町は、山梨県西八代郡の旧市川大門町、旧三珠町、旧六郷町の三町が合併して平成17年（2005）10月に誕生した人口約16,000人の町である。甲府盆地の最南端に位置し、甲府盆地を流れる笛吹川、釜無川が芦川と合流し、富士川として静岡県側に南流する合流地点付近左岸に位置する。釜無川を挟んだ対岸は富士川町で、笛吹川を挟んで甲府市と隣接し、北東側は笛吹市、南側は身延町と隣接している。芦川河口付近の市川大門地区から三珠地区にかけては、河川に面し

た低位面に市街地が広がるほか、町域はほとんどが山間地で、御坂山地から身延町下部方面に続く山地に多数の集落を抱えている。旧市川大門町の南側をなす山々は、富士北麓の本栖湖方面から峨ヶ岳、古城山をつなぐように主として北西方向の山筋があり、その山中に四尾連湖がある。

御屋敷遺跡と夢窓国師母の墓は旧市川大門町の平塙地区にあって近い位置関係にあるが、この両遺跡の所在する平塙の岡（標高290.1m）は旧市川大門町市街地（標高250m）の南側にあり、市街地よりも一段高い段丘上に位置する。曾根丘陵の最西端にあたり、熊



第1図 古城山城跡周辺の遺跡と四尾連道





第3図 古城山城跡・古城山烽火台跡位置図

野神社のある岡を「平塩の岡」と呼び、西側の正ノ木稻荷のある小丘を含めて岡の南側にかつて平塩寺があったと伝えられる。平塩の岡は、南に古城山、蛾ヶ岳を中心とした山々が迫り、北側には笛吹川の流れと広大な甲府盆地をはさんで甲府市方面が遠望でき、また北西には八ヶ岳、西側には釜無川の流れと南アルプスの山々を望み、甲府盆地各地を一望できる場所である。

平塩の岡の真南に位置する古城山は、山頂に登山道を挟んで二つのピークがあり、登山道東側が山頂(867.2 m)、西側ピーク(866 m)が烽火台跡で、山頂付近から北・東・西の三方を中心に尾根が発達している。その中ではほぼ真北方向に細長く延びた尾根の先端、標高 722 m付近で高く盛り上がったピークが「御浅間林」と呼ばれ、古城山城跡が松林の中に残る。城跡付近はいくつかの尾根が集約した地点にあたり、御浅間林という呼称名は郭内の浅間社および林立する富士講碑に由来し、大我講の聖地とされた場所でもある。古城山への登山道は、平塩の大門碑林公園敷地内から四尾連湖、蛾ヶ岳方面に至る道があり、ハイキングコースとして整備されている。平塩から徒歩 2 時間で古城山城跡に至り、さらに烽火台までは 30 分、四尾連湖までは 1 時間程度を要す。古城山城跡は登山道沿いにあり、入口には 717.2 m の四等三角点が立つ。烽火台跡は古城山山頂のうち西側の頂に遺構が認められるが、旧市川大門町では東側山頂尾根に烽火台を整備し、東屋を建てたほか、花火打ち上げの筒をモニュメントとして設置している。これは市川大門地区の古くからの伝統産業としての花火産業が武田時代の烽火に起源をもつという説に由來したものである。

この平塩から上の四尾連湖ルートは、蛾ヶ岳から尾根沿いに南へ下ると本栖湖方面に至る。本栖方面へ抜ける道は、現在では利用者がほとんどないが、かつては甲府盆地から身延、本栖方面に行くための重要な山岳道路であったといわれる。本書では平塩から蛾ヶ岳経由、本栖方面への四尾連湖ルートを四尾連道と仮称する。

第2節 歴史的環境

旧市川大門町は、平安鎌倉時代には天台の拠点平塩寺や源義清館を中心に成立発展したといわれる。古くから富士川に面した交通の要衝で、岩間宿と府中間の宿として、また物流の中継地として栄え、近世以降は地場産業の和紙や花火生産で知られている。江戸時代には市川代官所、本陣が設置され、大正期には郡役所

が置かれるなど、河内地方の政治経済の中心地であった。

御屋敷遺跡、夢窓国師母の墓がある平塩の岡は、市川大門の市街地の南側台地上にあり、台地東側に流れる塩沢川の「湯の洞」にはかつて塩気を含む温泉が湧いていたことから「平塩」地名起源となったという。塩沢川の温泉としては、弘化 2 年(1845)頃、御屋敷遺跡北側の上手河原、摩利支天神社のそばに塩沢温泉が開発され、安政元年(1854)11月の地震で崩れ、明治 33 年に再興されたといわれるが、現在ではまったく痕跡がない。

平塩の岡は甲斐源氏の祖、源義清の館があった場所と伝えられ、現在熊野神社東側に「甲斐源氏旧蹟碑」が立つ。明治 18 年 3 月、西八代郡長であった依田孝が有志とともに甲斐源氏顕彰のために建立した銅製の碑で、題字は太政大臣三条実美の揮毫、碑文は重野安繹の撰文、書は長三州によるもので、源義清館の伝承、碑建立の経緯を記している。

源義清は大治 5 年(1130)、常陸国武田郷から父清光とともに甲斐国市川荘に流され土着したといわれる。『甲斐国志』では義清館の伝承地を平塩の岡北側の御屋敷地内とし、遺称とみられる関連地名などをあげているが、別に昭和町西条の義清神社、義清塚があり、義清神社境内からは発掘調査で 12 世紀代の遺物が出土していることから、館跡として有力視されている。

平塩寺は平塩山寺、山号白雲山とも、白雲寺ともいう。甲斐における天台佛教の拠点で、天台百坊ともいわれ、平塩の岡を中心にして東の塩沢川、西の鳴沢川を境とする台地面に寺域が広がっていたとされる。現在の台地西側にある福寿院、宝寿院は平塩寺関連寺院であり、東塔院(福寿院)阿弥陀如来、西塔院(宝寿院)薬師如来を本尊としたという。

『甲斐国志』によれば、平塩寺は天平勝宝 7 年(755)に行基開山として開創され、当初は山上、古城山にあったものが下ってきたと伝える。当初は法相宗であったが、延暦年間(782~806)に天台宗に改宗したという。義清の兄弟の覚義が近江国園城寺から平塩寺の主僧になっており(『新編武藏国風土記』)、甲斐国内では天台密教が甲斐源氏の勢力拡大とともに広がったとされ、勝沼大善寺の山中で見つかった白山平經筒(康和 5 年、1103)の文面にも叡山学者名が登場する。

『国志』によれば、平塩寺は承久 2 年(1220)に天台から真言に改宗したとされる。笛吹市境川町実相寺大般若経の裏貼から平塩寺の寺名と願主「空阿」の名前が見つかったが、空阿は義清の孫、逸見久義の子で、

夢窓疎石が平塩寺で師事した人物である。実相寺大般若経は平塩寺旧蔵品で、美和神社、別当寺の慈雲寺を経て江戸時代に伝來したといわれ、平塩寺で法善寺や大善寺、花井寺など国内の真言僧が写経したものと考えられている。夢窓国師は年譜では弘安元年（1278）、4歳で伊勢より入申し、9歳の年に父と平塩山寺に詣で、空阿大徳に教えを受けたとされる。

天正10年（1582）3月、織田信長による甲斐侵攻で平塩寺は焼失、廃寺となり、その後諸堂は周辺に移転して再建されたという。そのうち金剛山宝寿院はもと平塩上原にあったとされ、天文8年（1539）中興、天正間に真言宗寺院となった。

現在、平塩の岡には熊野神社が鎮座する。熊野神社本殿は江戸末の総欅造りで、壁面には立川流の彫刻で装飾される。また西側の正ノ木稻荷社は貞觀2年（860）創建と伝えられ、現在の社は文化14年（1817）建立である。稻荷社の南には夢窓国師が築いたとされる琵琶池跡があったと伝えられ、平塩寺の園池跡と推測されるが、現在では町営住宅となり埋められたといわれ、現在では地元でも池のことを知る人はいない。

正ノ木稻荷社の北側には浅間社があり、参道に沿って南面する富士講碑群が15基立ち並ぶ。富士講のうち丸仙講の開祖から12世先達までの供養顕彰碑で、天保3年（1832）から昭和31年（1956）までの年号がみられる。

平塩の岡北側の金剛院坂には平塩岡追遠碑（昭和34年）があり、平塩寺の由緒や夢窓国師のことなどを記しているが、この石碑は文面によると白雲寺（平塩寺）の三門があった場所に建立したものという。また碑の傍らには百坊にかつてあったといわれる延命石（石神）が祀られている。

夢窓国師母の墓は平塩岡西方、西平塩にあり、平塩寺の西を区切る鳴沢川の左岸に所在する。現在では文久年間の供養塔のそばに明治期建立とみられる顕彰碑が立ち、「夢窓国師母の墓公園」として梅園の中に整備されている。平塩の七不思議のひとつ「さかさ梅」伝説の場所とされ、国師が母堂の墓参りをした際に梅の小枝を墓の傍らに挿したところ、枝が垂れ下がる大木となつたということである。あるいは『国志』記載の平塩寺ゆかりの「常咲梅の株」があった場所であろうか。

古城山城跡は平塩の岡南側にそびえる古城山にある。山裾には現在、大門碑林公園が設置されているが、公園内の鳴沢川沿いに設けられた四尾連湖に至るハイキングコースを辿ると、標高722m付近の御浅間林に

古城山城跡、山頂付近の866m地点に古城山烽火台跡がある。この市川大門町から身延、本栖方面に抜ける山岳道路、仮称四尾連道は、富士講が盛んな頃は富士山登拝、富士八海巡りのための信仰の道であった。町では山頂東側のピークを烽火台の公園として整備し、東屋などが配置しているが、この北斜面には「仏岩」という大きな岩場があり、古代の山葬の場所と推測されている（『市川大門町誌』）。

富士講の中でも旧市川大門町域で盛行したのが大我講で、古城山城跡のある御浅間林には主郭に大我講の石碑が林立する。この大我講は天保10年（1839）、市川大門村の長百姓大寄友右衛門（1784～1856）が丸仙講から分かれて組織した講で、講員は市川大門村を中心に富士川を挟んだ河内地方の西鷲村、山間部の古関村、北川村、三沢村など、千人を超えたという。天保の飢饉のち忍野村の民を救うため忍野八海（元八湖靈場）を再興し、179両を寄附したといわれる。古城山に神靈を勧請して浅間社を創設したとされている。大我講は毎年、富士登山に際して忍野八海を巡拝し、忍野村の朝日浅間神社に参詣し、別当東園寺に登山の旨を届けることになっていた（『市川大門町誌』）。この大我講に関する石碑は山梨県内の旧市川大門町、旧中富町、忍野村、富士吉田市、富士宮市など各地にみられる。

四尾連道沿いの富士講碑としては、市川大門町内の大竜寺跡に嘉永2年（1849）の大我講碑1基、平塩の岡浅間社境内に丸仙講碑15基がある。山中に入ると古城山中腹に万延元年（1860）の大我講の小御嶽碑、亀岩八大竜王碑の2基（図版3-20）、古城山城跡内、御浅間林内に大我講碑11基（図版3-23～26）、四尾連湖畔に大我講関連の尾崎龍王碑1基、根子に大我講関連の御内八海道供養碑1基が存在する（深沢2015）。古城山へ至る登山道沿いに並んで立つ小御嶽碑、亀岩八大竜王碑には、以下のようない文面がある。

亀岩八大竜王碑

（表）亀岩八大竜王（高さ91×幅38×奥行22cm）

（右側面）萬延元年 庚申六月日

（裏）施主

上北町（後続して村松姓4名、高埜、山本、近藤姓2名、大原の計9名を列記）

小御嶽碑

（表）小御嶽（高さ98×幅64×奥行21cm）

（左側面）

萬延元年庚申六月三日

願主 市ノ瀬重太郎

これらの石碑が立てられた万延元年（1860）は庚申の御縁年に当たる。小御嶽は富士山五合目の小御嶽大権現のことなので、古城山御浅間林の土塁で囲まれた主郭部分を富士山頂の御鉢に見立てたとすると、五合目付近にあたるこの場所に小御嶽碑を建立したものといえる。つまり古城山は富士山の写し靈場ではなかつたか。また龜岩は富士山七合五尺の岩で、水神（八大竜王）を祀ったものであるが、この石碑のある道下にはかつて湧水地点があったという（以上、深沢広太氏ご教示）。

同様な写し靈場の事例に旧中富町西嶋の山中に西嶋浅間神社がある。文政7年（1824）の創建で、西嶋地区から上る道に三筋あり、北口、金山口、表口の名称をもつ。境内には弘化2年（1845）から明治43年（1910）の富士講碑7基が並び、大我講の講印もみられるが、その金山口の五合目相当の位置には小御岳神社があり、古城山同様の富士山の写し靈場であったことがわかる（深沢氏ご教示）。西嶋地区は市川大門町に次いで多くの大我講員が居住した地域であった。

四尾連湖畔には嘉永7年（1854）7月建立の尾崎龍王碑が立つ。側面には「大我講司□朝□兌孝真老筆」とあり、大我講開祖大寄友右衛門の書である。碑文裏面には願主名として四尾連村の人名が多数刻まれるほか、基礎には「市川」「甲府」のほか「峯村」「根子村」「堀切」「折門」等、山道沿いの村々の願主名、講中が記載されている。

また根子の山伏屋敷にある御内八海道供養碑は嘉永元年（1848）8月建立である。碑面には大磯小磯村講中本願人のほか「四尾連村」「小磯村」「芝草村」「三沢村」などの多数の人名が記載され、四尾連湖から本栖湖をつなぐ巡礼路の安全を祈願した石碑とみられ、とくに四尾連湖を含めた内八海道が成立したのちの信仰の道としての状況をうかがうことができる。

この四尾連道の利用実態については明らかではない

が、近代の史料としてこの山道に関する大町桂月の紀行文が知られている（大町1914）。本栖湖北畔から反木峠、大澤（雨乞い滝）、根子村、峯村、折門村を右に見て蛾ヶ岳から四尾連湖に至る峯伝いの道を歩いた大正3年（1914）8月の文であるが、この中に根子村の旅店（宿）の一老女の話として、「旅客の来り宿りするもの、一年中ほんの数十人に過ぎず。八海廻りの道者も、一年中一組あるか無きか」と記され、大正期には既に廃れつつあった道であることが窺がえる。

その他の石造物としては、四尾連道を市川大門町から上ると、古城山城跡に至るまでの間に北向きの石龕1基（愛教山の石龕、町指定文化財、図版3-18）があるほか、登山道からはずれた尾根上に石祠1基が存在する（図版3-19）。石龕は四尾連湖周辺にまとまって分布する特徴的な石造物で、馬頭觀音などの石仏を壁と屋根をかたどった石材で囲ったものであり、屋根は石祠の屋根部のような彫刻を伴っている。

なお、第1図の遺跡分布図の番号は以下の城館跡、烽火台跡、石碑名等である。

- 1 古城山城跡
- 2 古城山烽火台跡
- 3 一条氏館跡
- 4 大木氏館跡
- 5 黒沢口留番所跡
- 6 鐘撞堂山烽火台跡
- 7 御前山烽火台跡
- 8 城の峰烽火台跡
- 9 寺所の城山
- 10 鴨狩津向の城山
- 11 岩間関所跡
- 12 岩間代官所跡
- 13 尾崎龍王碑
- 14 御内八海道供養碑

第3章 夢窓国師母の墓地點

第1節 夢窓国師母の墓について

夢窓国師母の墓は、正ノ木稻荷のある岡の南側、鳴沢川が古城山方面から北流して西へ屈曲する左岸、山麓裾部の「夢窓国師母の墓公園」内にあり、鳴沢川に北面して梅林公園が整備されている。この場所は母の墓にちなんだ逆さ梅の伝説をもつ場所である。

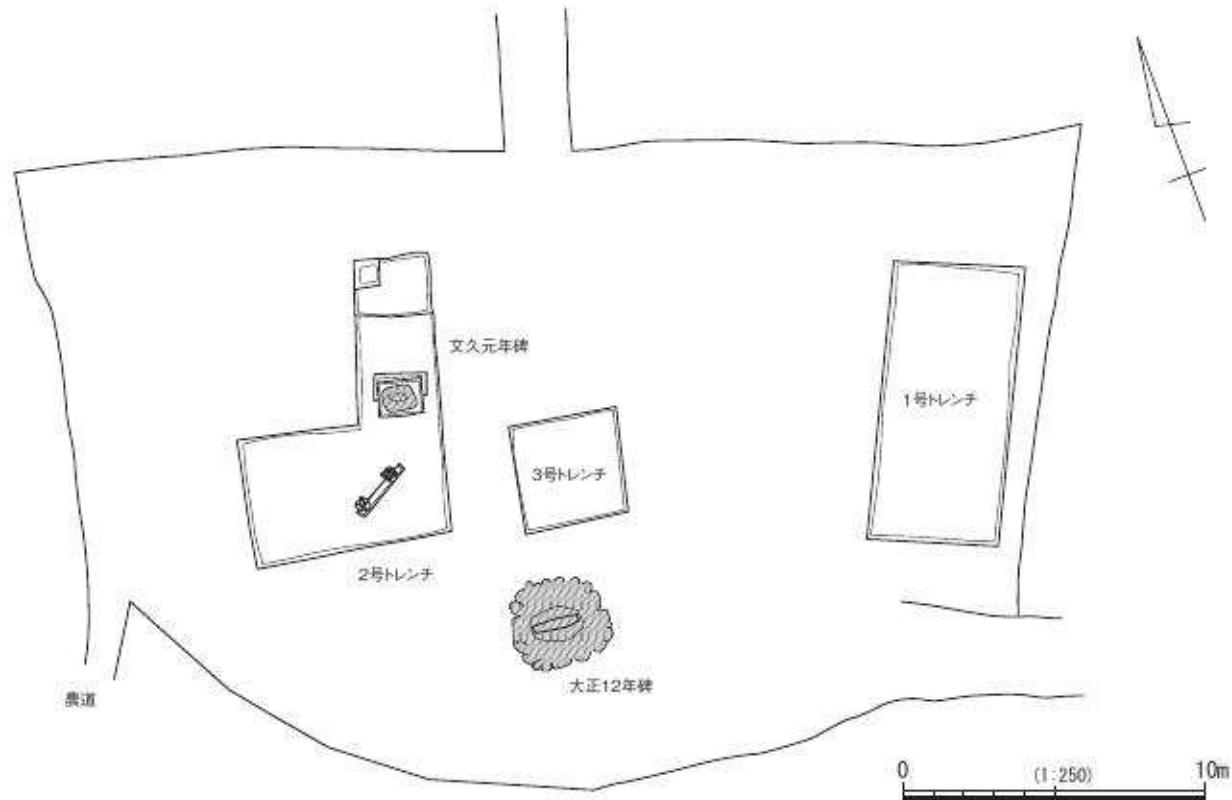
公園内には石碑が2基あるが、中央南寄りに東郷元帥題額、島倉龍治撰文による「夢窓国師母堂之墓」碑、

やや西寄りに文久元年の「夢窓国師御母之墓」碑が北面して立つ。現在では東側に東屋が建築されるなど、発掘調査後に歴史公園として整備されている。

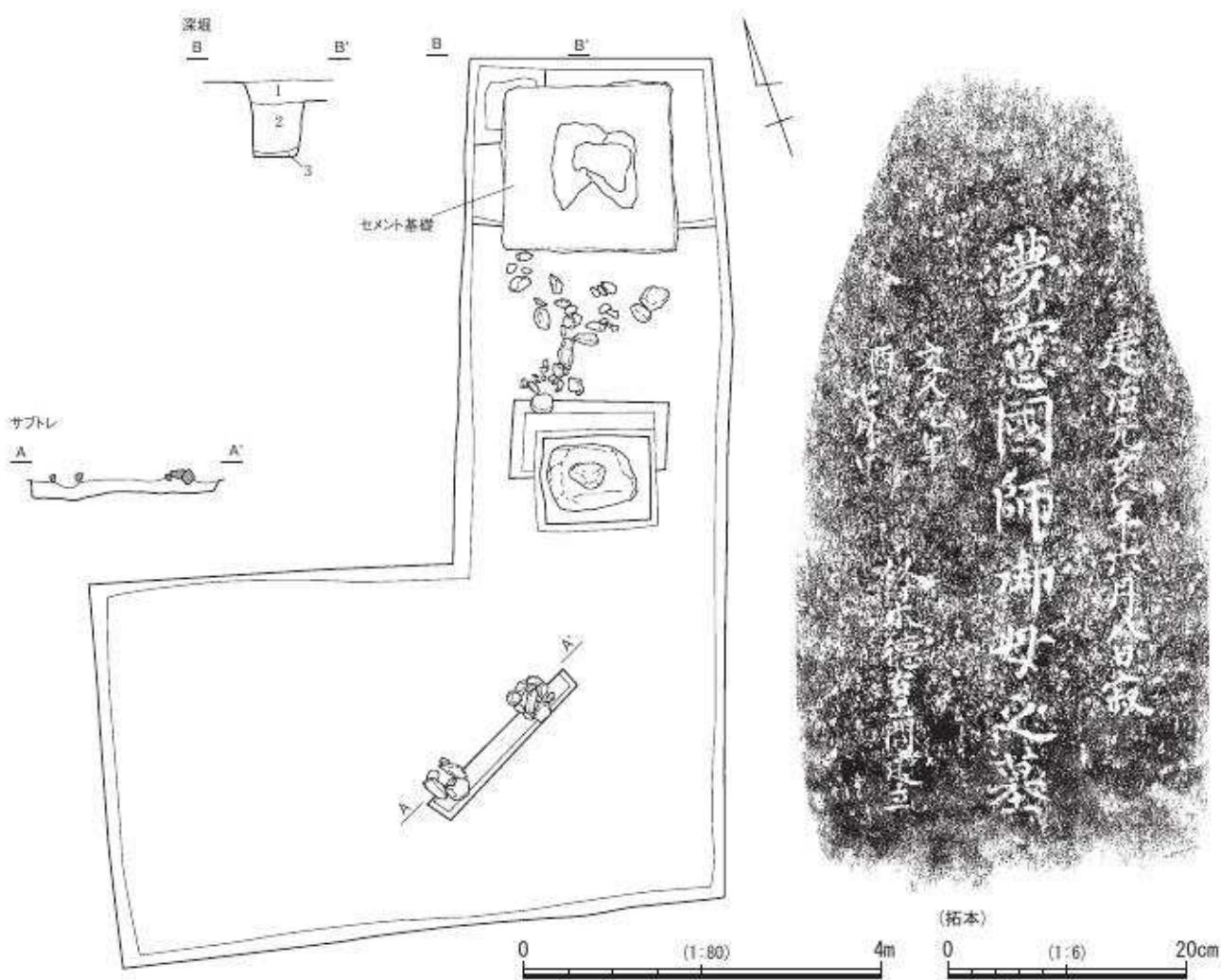
「夢窓国師御母之墓」碑は高さ78cmの自然礫に刻まれた墓標で、文久元年（1861）建立である。碑文は4行の縦書きで、以下の通りである（第5・6図）。

建治元亥年六月八日寂

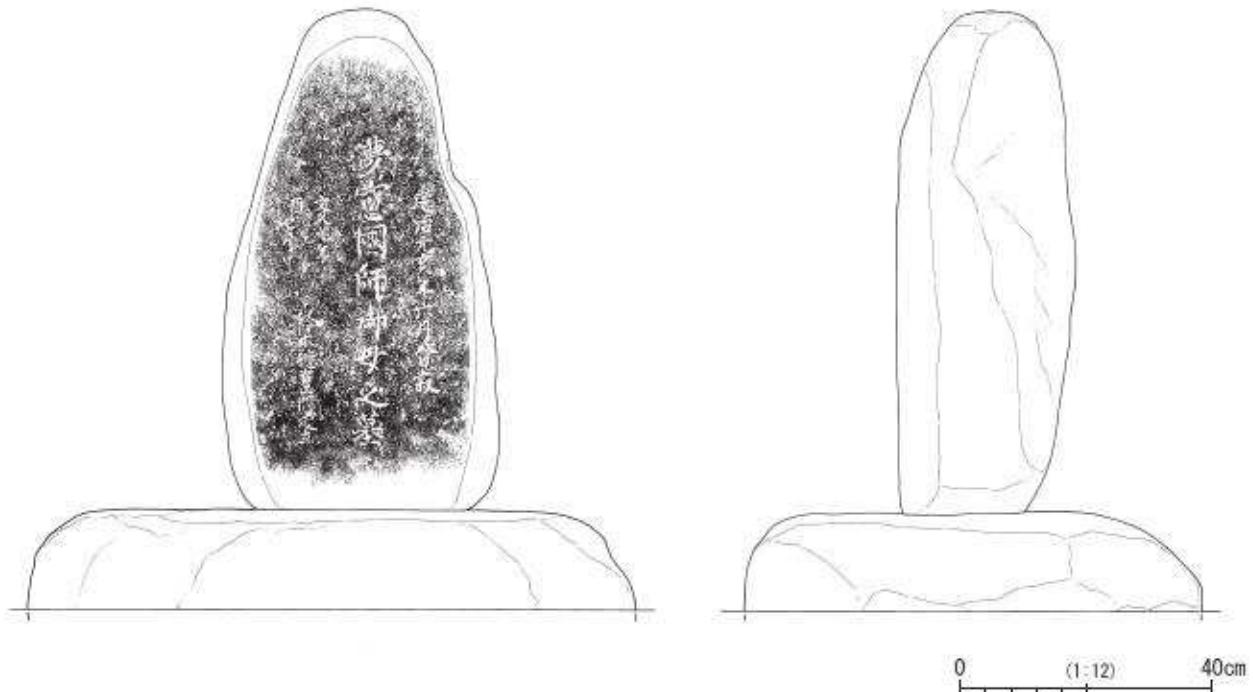
夢窓国師御母之墓



第4図 夢窓国師母の墓地点全体図



第5図 2号トレンチおよび拓影



第6図 「夢窓国師御母之墓」実測図

文久元年

酉七月 鈴木徳右衛門建立

これには建治元年（1275）6月8日と、母が逝去した時が夢窓国師年譜にみる一般的な年月日（弘安元年8月）と異なっているが、これが何に基づいたものであるかは不明である。この供養塔は、国師が母堂の墓参りをした際に梅の小枝を墓の傍らに挿したという「さかさ梅」伝説に基づいて祀られたものであろう。

もうひとつの「夢窓国師母堂之墓」碑（大正12年、1923）は、文は以下の通りである（本文縦書）。

夢窓国師母堂之墓

伯爵東郷元帥閣下題額 正五位烏倉龍治撰文
国師母堂不詳姓氏及生誕年月或云乾氏又云平
政村女嫁左佐貴朝綱祈子近長谷觀音以生子即
国師也既而朝綱盡室自伊勢移甲斐居平鹽未幾
母堂逝国師年甫四歳實弘安元年八月也六年國
師九歳從父謁空阿上人於平鹽教院薙髮出家誦
經修禪回向唯在母堂耳壯年巡錫四方遍訪先達
顕參密請遂受佛國國師印可德澤風化一世其所
以致此者雖由顯考之教養而母堂之冥護亦居多
焉墓在平鹽蕪穢久香筆幾絕予深慨之頃者與道
友背謀立碑以表之庶幾慰國師之心歟乃作銘曰
菩薩木又維孝為厚世間善根維恩為首母克護兒
兒克報母勤諸貞珉伝諸不朽

甲府裁判所検事正 烏倉龍治撰之

海軍元帥 東郷平八郎題額

大正十二年十二月

これによれば夢窓国師の母は、姓氏は定かではないが平政村の女とも伝えられ、佐左木朝綱に嫁ぎ、長谷觀音に祈願して授かったのが国師であった。伊勢より甲斐平塩に移ったが、その年弘安元年（1278）8月、国師4歳の時に亡くなった。平塩では空阿に教わった等々が記されているが、これらは夢窓国師年譜（『天龍開山夢窓正覺心宗普濟國師年譜』）の記載に準じている。

『国志』平塩寺の項には夢窓国師年譜の一部が次のように挿入されている。

（前略）弘安元年戊寅師四歳、母ノ党ニ有事、父挙家而逃ガレ、入甲斐居焉、（略）八月喪母（後略）

伊勢源氏の佐左木氏が平氏（一説には平政村）といわれる母の一族と何らかのいさかいがあって甲斐国に逃れてきたとされるが、それが甲斐源氏あるいは石和御厨との関係で佐左木氏側の地縁、血縁を頼ってのことではなかったかと思われる。

平塩寺の中でのこの場所の意味合いについては、鳴沢川をはさんで西側にあたり、平塩寺域外とみられるが、付近には平塩の岡南側の広域農道沿いには五輪塔などの石塔類がみられる。『国志』御屋敷の項には、上原・五輪原に「石浮図・五輪塔」などが散在する状況を記載するように、平塩の岡の南側、古城山山麓周辺は中近世の墓域であった。夢窓国師母の墓地点もそうした一角に位置する点には注意したい。

第2節 試掘調査の成果

試掘調査は1988年7月26日から28日までの3日間実施した。東西にトレンチを3ヵ所設定し、遺構確認面まで掘り下げたほか、一部断ち割りや深掘り、土層堆積状況の確認を行い、平板実測により全体図、各トレンチの平面図を作成するとともに、断面図を作成した（第4・5図）。また石碑については文章の読み取りを行うとともに、文久元年の墓碑については拓本を採取し、実測作業を行った。

1号トレンチは公園の東側に設定した44×9.3mの調査区である。調査の結果、遺構は見つかっていない。

2号トレンチ（第5図）は文久元年石碑のあるトレンチで、石碑を中心にするように3×9.5mで設定した。その結果、石碑北側のトレンチ北端に18m四方のセメントの基礎が見つかり、中央には不定形の穴が開いていた。この穴はちょうど石碑の台座と同じくらいの大きさがあることから、現在の石碑が当初立てられていた場所と考えられた。台座周辺の地固めのためにセメントで基礎を造ったとみられるが、何らかの理由で3.5m南の現在地に移動したものと思われる。セメントの基礎を除去して下層を掘り下げ、断面観察をしたが、とくに墓に関わる遺構は検出されなかった。したがって墓石そのものは埋葬地ではなく、供養塔として後世立てられたものと判断した。またトレンチ南

側では根石状の集石2箇所が検出されたため、集石が見つかった南西側を4×4.4m拡張した。また集石にかかるようにしてサブトレンチを設定し、集石下層断面を観察した。集石はごく浅い位置に14m間隔で存在し、ピットの掘り込みを伴わないことから、近世以降の所産であろうと考えられた。また石碑とセメント基礎の間には多数の礫が集石状に不定形なまとまりで検出されているが、とくに遺構とすべき状況ではなかった。

3号トレンチは東郷元帥碑の北側正面に設定した3.5m四方のトレンチである。とくに遺構は見つかっていない。

遺物（第18図）は、出土地点不明ながら近世から近代以降の碗皿片のほか、2点の陶器類がある。1は古瀬戸とみられる中世陶器の壺頸部片で、外面には横位の条線状調整痕があり、灰釉が全面に掛けられている。詳細な出土地点が不明であるが、中世平塩寺と関連した遺物といえる。また2は内外面施釉の灰釉境で、削り出し高台で整形され、内面には重ね焼きの痕跡がある。中世的な様相はあるが、近世に下ると思われる。

中世陶器が出土していることから、中世に関わる遺構が存在したとみられ、集石や集石状の礫群が遺構の一部であった可能性も否定できないところではあるが、短期間の調査のため精査、確認が十分に行われたとはいいがたい。

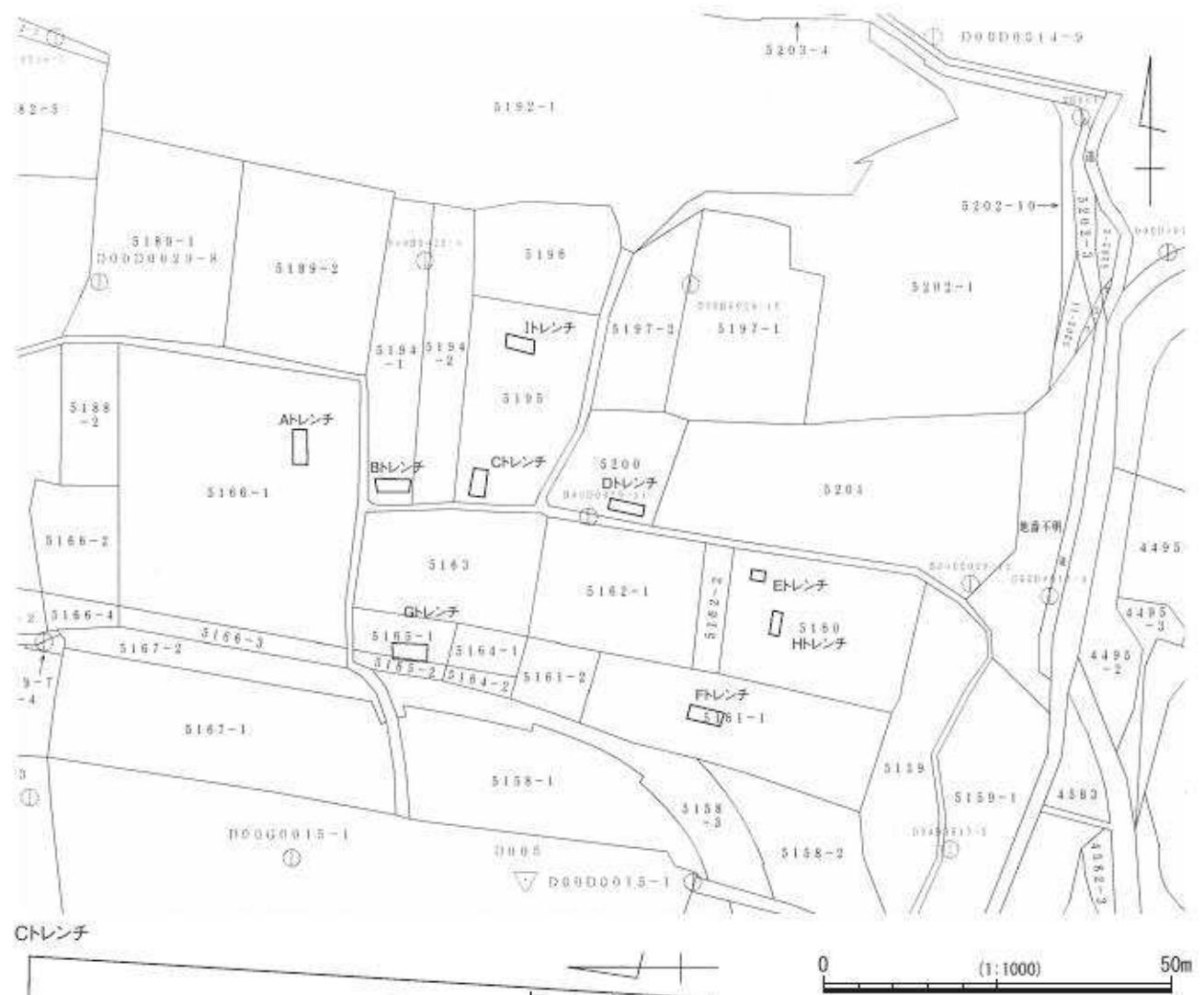
第4章 御屋敷遺跡

第1節 平塩寺と義清館跡

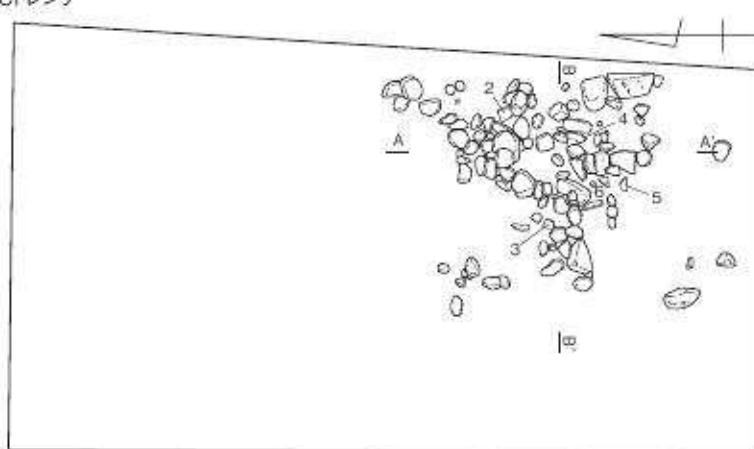
御屋敷遺跡がある「平塩の岡」は甲斐源氏の祖、源義清の居館伝承地であるとともに、白雲山平塩寺があったとされる場所でもある。平塩寺について『国志』に次のようにある。

「平塩寺ノ廃跡 平塩岡ト名ク城山ノ北面ニ在リ老松林ヲ為ス除地東西七十間南北八十間ナリ境外ハ畠地ナリ東ヲ塩溪ト云フ温泉アリ其ノ東ヲ湯ノ洞ト呼ブ蛭崩レ埋リテ今ハ無シ古人云フ地鹹塩ヲ產ス蒸氣ノ溫流ヲ為スナリ因テ平塩之名有リト西ハ空濛鳴沢ト名ズク北ニ下レバ今ノ村居ナリ岡ノ上平坦ナル處即チ平塩寺ノ伽藍跡ナリ宝寿院ノ記ニ平塩寺ハ貞觀七乙酉ノ歲開基ス天台宗ナリ承久二庚辰ノ歲真言宗ニ改ムト云云今校考スルニ都留郡下和田村花井寺ノ藏ムル所大般若經四百五卷ノ尾ニ安貞二年三月十日未ノ時許リ甲斐平塩ニ於テ書畢ヌ願ワクハ書写ノ力ヲ以テ於極樂界ニ生レ見仏聞法ニ由リ自他無生ヲ悟ランコトヲ筆師幸明

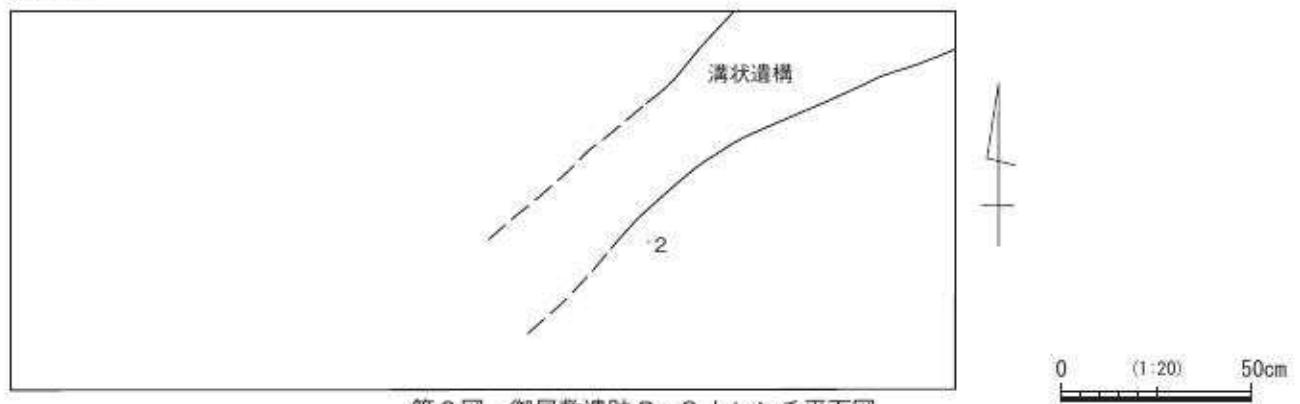
ト、同五百六十七卷ノ尾ニ平塩村住人同妙尼生年廿七才也建長二年太才庚戌五月八日、武田八幡宮藏ムル所大般若經五百九十卷ノ尾ニ建長六年甲寅七月十六日一校シ畢ヌ平塩寺隆舞トアリ常行三昧堂上番過去帳ニ平塩寺旧物宝寿院之藏当寺ノ貫首逸見法印空阿トアリ武田系國ニ逸見光長ノ三世久義ノ次子空阿平塩法印ト称スト是ナリ又当寺文殊丸・満寿丸・同別当古沢禪師林慶堂塔建立、正尊法橋・折然律師當寺再興菜食賢尊ト載セタレドモ皆年月ナシ夢窓国師ノ碑銘（中略）薬師堂一条即チ一蓮寺ナリヘ売リタルコトハ里人モ今ニ語リ伝フ（中略）廃跡ノ小堂ヲ御念仏ト称ス本尊ハ阿弥陀・薬師・日光・月光・十二神将ナリ市川ノ郷中真言宗十五ヶ寺毎年九月会合シテ一七日法事ヲ修ス引声念仏ノ行事アリ貢田七石余百姓一人其地ニ居住シテ法会料ヲ運ブ琵琶池長三十間横十五六間ヨリ四五間形琵琶似夢窓ノ造レル林泉ノ址ナリト云常咲梅一株島中ニ在リ今枯レテ代リ木ヲ植ウ経塚塔辻ト云フ処アリ六所



第7図 御屋敷遺跡トレンチ配置図



Bトレーナー



第8図 御屋敷遺跡B・Cトレンチ平面図

權現・弁財天・庄ノ木稻荷里人庄ノ木八左衛門ト称ス
一蓮寺ニモ又祀之古堂ヲ恋慕シテ彼所ニ遷ルトモ云古
城山ト平塩ノ間曇天暗夜ニ燐火アリ山ノ中腹ヲ東ヘ行
ク或ハ疾ク或ハ徐ク迦葉坂ノ辺リニ至ルト云フ古時三
昧場ニ寺ヲ建テ減罪ヲ司ドラシム一郡ニ数所アリ残卷
風土記ニ巨麻郡寺院五字ト云フ是レナルベシ同記ニ白
雲寺寄田二十九九三畝田行基ノ開基ニシテ而之ヲ製ル
有リ弥陀尊像○○○ト市川ノ並ビ記シタリ平塩ノ本尊
モ阿弥陀也コレ即チ白雲寺ナルモ知ルベカラズ又山上
ニ旧址アル事ハ後ニ記ス」

このように『国志』では平塩の岡の名の由来に始まり、平塩寺の範囲、由緒、夢窓国師のこと、過去帳記載の人名、琵琶池、地名、堂宇の所在、山の上の旧跡のことなどを詳しく記している。

また義清館跡とも伝えられる「御屋敷」について、『国志』に次のようにある。

「一御屋敷ノ跡 平塩岡ニ在リ東西二百間南北百間
西ヲ表ト為ス北ハ絶崖ナリ今ノ村戸ヨリ高ニ町余東ハ
塩浜南ニ熊野權現ノ岡山松林ナリ御馬冷シ場・古井ナ
ドモ存セリ里老伝ヘテ刑部三郎義清ノ館址ト いと
しくはにふの小屋のいふせきに千鳥鳴なり市川の里
口碑ニ伝フル所義清ノ詠歌乃チ此處ナリト云フ按ズル
ニ慶長・元禄ノ打量帳ニ御屋敷ト記セリ貢地ナレドモ
今ナホ呼ビテ地名トス義清ノ事ハ世已ニ遙カナリ今市
川氏累代ノ居跡モ此ノ郷中ニ在ルベシ東鑑ニモ市川掃
部ノ允高光入道見西ガ甲斐ノ国市川屋敷トハ見エタレ
ドモ今指シテ其ノ所ヲ知ルベカラズ天正壬午ノ春 神
祖御陣営ヲ架ケラレシ処ナル故ニ當時御屋敷ト唱ヘシ
ト云フヲ是トスベシ（中略）御鷹場并ビニ御案内所ニ
ハ凡テ御仮屋ヲ建テラル此處ニモ仮御殿アリシ故ニ御
屋敷ト唱フルト云フコト最モ相当レリ其ノ頃マデハ民
戸モ多ク岡ノ上ニアリ北面ニ三郡ノ地ヲ視開キ東西通
路宜シキ佳境ナリ芦川ノ蛭ニ竹藪四町歩程アル処ヲ今
モ御馬繫ギ場ト称ス

○刑部三郎義清ノ墓 御屋敷ノ南畠中ニ巨石アル所ヲ
云フ近キ頃農事ノ隙アリ傍ノ石ヲ徐クルトテ其ノ下ヲ
掘リ窺ヒシニ土中ニ石櫃露ハレタレバ人懼レテ本ノ如
ク封ジ置クト云ヘリ同続キノ山入りニ上原・五輪原ト
云フ处アリ畠ノ畔蹊ノ傍ラニ石浮図・五輪塔ノ壊レ倒
レタル夥シク散在セリ古時ノ三昧場ナルベシ畠地ヨリ
刀劍ノ折レ・鉄具・陶器ヲ得ル事アリ近頃モ岡ノ上古
松樹ノ下ニテ農夫一抔土ヲ發キ獲ル所円鏡二径五寸半
短刀一口・骨壺一・青銅ノ經筒一長七八寸径三寸余ナ
リ古ヘ從リ里中凡テ附樓ヲ發スル事ヲ禁ズト云フ（後
略）」

まず義清館跡説を地名等から検討するとともに、市川氏館の所在についても言及し、さらに天正壬午の際の徳川方の仮御殿があったという点を最も相応しいものとして評価する。また義清墓と伝えられる巨石下から石櫃が出たこと、上原・五輪原に石塔類が散乱すること、平塩の岡の上から経塚、藏骨器が出土したことなど、興味深い記述が続く。経塚に関しては平塩寺の項の「経塚塔辻」という地名との関連性がうかがえる。

甲斐源氏の館跡は甲斐国内各地に存在したはずであるが、実態として把握できていないのが現状である。そうした中で釜無川流域に存在する韮崎市の武田信義館跡は、近年の調査で当時の遺物がまとまって出土するなど、確実性を高めている。その信義館跡と御屋敷遺跡の立地は、低位段丘面を見下ろす一段高い段丘面にあり、天然の段丘崖や河川を屋敷の境とする点が類似している。あらためて義清の配流と平塩寺と関連性についての再検討が必要ではないだろうか。宮坂武男氏も御屋敷地点について、「豪族の館跡としては最良の場所であるが、後究にまつ」と評している（宮坂2006）。

現在、平塩の岡と呼ばれるのは、狭い意味では熊野神社、甲斐源氏顕彰碑、墓地がある場所を指し、岡をはさんで北側が御屋敷地内、南側が平塩寺推定地となる。西側には町道を挟んで正ノ木稻荷、丸仙講碑群のある岡がある。この一帯はブドウ、野菜の畠となり、住宅地が点在している。とくに正ノ木稻荷南側は宅地開発されているが、そのあたりが琵琶池の跡とみられる。二つの小丘の間に南北の道となっていて、北側の段丘崖の縁には山門があったといわれ、坂の途中に延命石を祀る。また反対側の南端、山裾には鳴沢川沿いに四尾連道の入口となる。平塩の岡の北西にはやや離れて段丘縁部に福寿院、宝寿院の2寺があり、南側には墓地が広がっている。平塩の岡の南側および北側は比較的平坦であるが、南側については市川中学校あたりから緩斜面となり、山裾に至る。北側の段丘下は市川大門町の市街地で、約40mの高低差がある。

平塩寺については、山裾の大門碑林公園前を通る農道にかけて、「天台百坊」といわれる坊院群が広がっていたとみられるが、市川中学校や碑林公園が所在するなど今日ではわかりにくくなっていて、坊院群所在地の検討はほとんど行われていない。

第2節 天正壬午の乱と御屋敷遺跡

『国志』は「天正壬午ノ春 神祖御陣営ヲ架ケラレシ処ナル故ニ當時御屋敷ト唱ヘシト云フ」と記したの

ち、以下のように天正壬午の乱の際の徳川方の動きを詳述している。

「壬午ノ諸記ヲ校スルニ二月十八日浜松御首途中略三月八日興津ニ御動座九日營ヲ万沢ニ移サル諸勢ハ身延ニ進ム穴山梅雪迎ヘテ前駆ヲナシ文殊堂ノ麓市川口ニ乱入ス十一日甲府着御織田信忠ニ御対顔夫レヨリ信州譲方ニ御發向アリト云云（中略）同四月十日織田右府中道ヨリ凱旋ニ因テ姥口ノ旅營ニ会シ玉ヒ彼ヨリ相伴ヒ御帰陣ナリ凡ソ四十日ニ及ビ市川ニ御滞在ト見エタリ同七月ハ御本陣姥口ヨリ入御ナサセラレ河内路ヨリハ大須賀五郎左衛門御手先トシテ入り来リ市川ニ屯ヲ張リテ州民ヲ安撫ス大久保新十郎・成瀬吉右衛門・日下部兵右衛門ノ輩合属シテ同十二月御制法ノ定マリシマデハ此處ニテ国事ヲ沙汰シ行ヒタリト云フ」

武田家滅亡後の甲斐国を巡り、徳川、北条が争った天正壬午の乱（天正10年 1582）については、平山優氏による論考が詳しいので、以下に引用する（平山 1998）。

武田氏滅亡後、織田信長が本能寺の変に倒れると、甲斐侵攻をねらう北条氏の勢力拡大に呼応する大村党らの土豪などの動きに対して、徳川家康は甲斐国内の多くの武田臣を懐柔し、有泉大学助らの穴山衆に対する処置、東郡勢力が北条軍に結集する前に壊滅した。家康は6月28日に大須賀兼高・大久保忠世らの先手衆を甲斐に派遣し、市川に大須賀、甲府に成瀬正一、岡部正綱、穴山衆を配置し、甲斐国内各地で土豪、国人層に対する懐柔、慰撫工作を行ったが、大須賀の甲斐平定は容易ではなかった。『三河物語』によれば「大須賀五郎左衛門ハ市川に居たり、然共爰々彼方、一騎共にて鎮らざる処へ、大久保七郎右衛門姥口へ付たる由を五郎左衛門尉も聞て、さてハ七郎右衛門尉が付たるが、今ハ心安とて大息をつきける処に、石川長土（門）・本田豊後父子も付たると申けれバ、大方一騎も鎮りけり」とあり、徳川方が本格的に投入されることで次第に土豪層の蜂起は収まり沈静化をみたようである。

家康は7月2日に掛川城、4日には駿河田中城に入り、甲斐侵入に際して伊豆・駿河の北条軍の侵攻に対する布陣を敷いた。家康は甲斐侵入ルートを中道往還と定め、九一衆の渡辺因縁介らを案内役に任じるとともに警護を命じた。8日、精進を経て甲府に入り、その後、若神子を拠点とする北条氏直軍に対し、徳川軍は新府城を本陣とし、能見城・堂ヶ坂砦を最前線として対峙することとなる。

御屋敷遺跡は熊野神社のある丘の北側の台地面で、

現在地形や地割に何らかの遺構や痕跡を見出すことはできないが、八ヶ岳方面から甲府、東郡にかけて見通しが利き、かつ中道往還の裏道ともいえる四尾連道の登山口がある御屋敷遺跡周辺に市川の屯があった可能性は十分考えてよいだろう。

第3節 地中レーダー探査報告

平塩の岡の熊野神社、正ノ木稲荷を中心とした周辺の15箇所について、1989年3月13日～16日に渡辺広勝氏（テラインフォメーション・エンジニアリング）に依頼し地中レーダー探査を実施した。以下は平成元年3月28日作成の仮報告で、一部加筆訂正して掲載する。

〈市川大門町遺跡地中レーダー調査仮報告〉

今回のデータ解析は、画像処理データにおいて判読したもので、現地での直接判断と多少異なる。また、過去における各種のデータを参考にした。しかし、普通このような場合、地区の土質の状況、耕作物の種類、遺跡の成り立ちなどにより、それら過去の判読データはあまり参考にならない例が多い。今回の場合もとくにその問題は考慮した。その最も重要な要素として、表土層が薄いことで、表土が少ないと遺跡を識別する上で極めてやっかいな問題である。従ってこのようなことから、今回のデータは表土層の異状反射箇所の発生について、重点的に注目した。なお本報告は略式であることをご了承されたい。

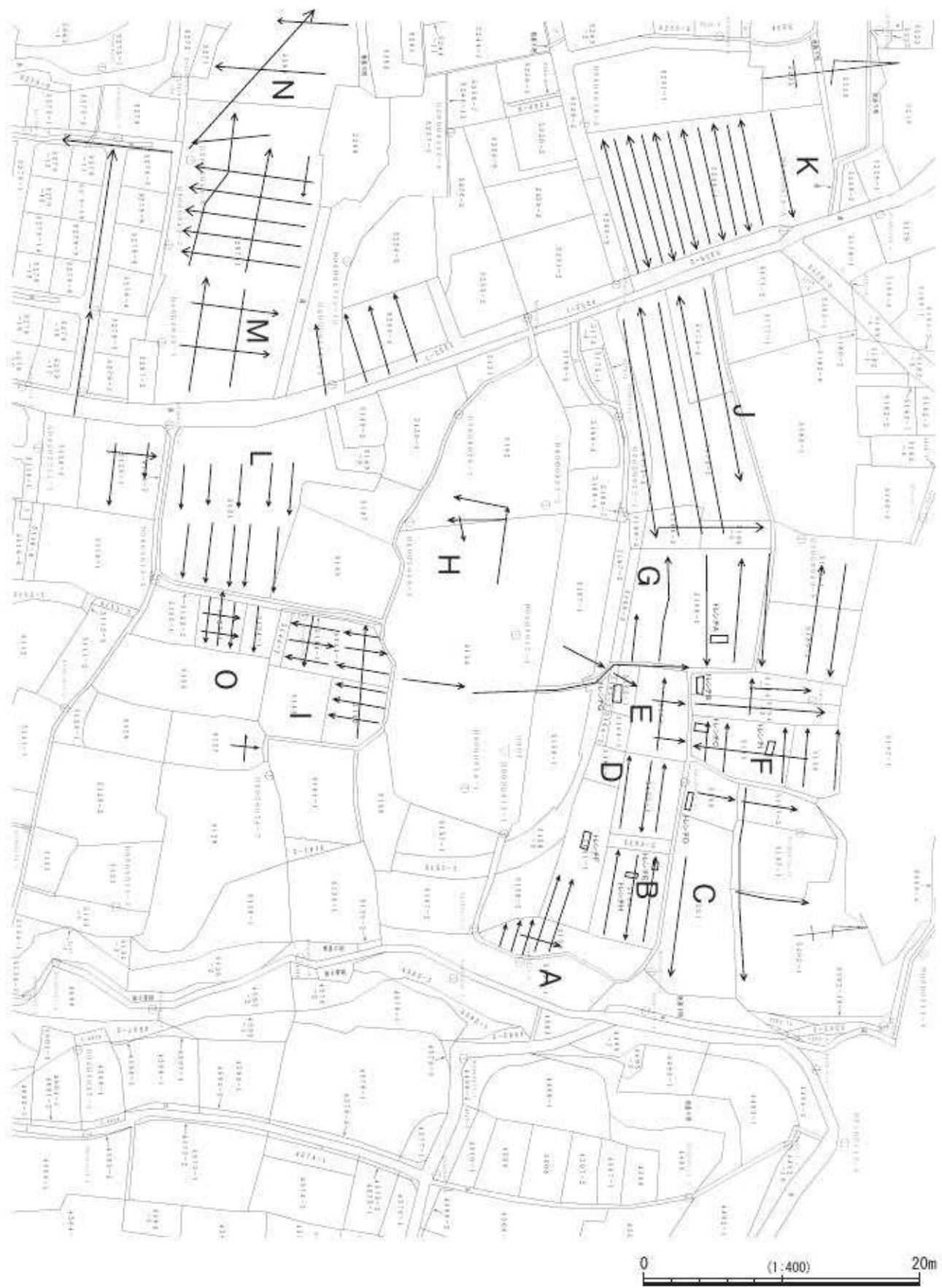
解析上現地判断とは、とくに異なったものとして、L地区、Nおよび広域農道脇地区がある。またK地区試掘による状況は、試掘結果が思わしい状況ではない。これからみても今回のデータ内容が、かなり不安定であることがわかる。従って遺跡としての希望的観測は、このデータに沿って試掘した後の結果を重視されたい。

データは各ブロックに分け、AからOまでとして、以下の通り略報告する。

A 表層土が基盤層との間に2層に別れているのが見られる。全体に浅い範囲にあり、表現は小さい。小規模な柱穴跡のようなものもみられるが、遺構かどうかはつきりしない。

B 盛土的要素をもつ表土である。基盤土上の反射状況をみて遺構的とみているが、柔軟の問題もあり、断定はできない。

C 基盤土上の変化が比較的豊かに表現されている。このラインで遺構が試掘されないかぎり、この付近の



第9図 地中レーダー探査の実施地点

他の地点におけるデータからの遺構指定は、難しい局面を考えなければならない。現在、データにみられるパターンが遺構とすれば、攪乱が激しいので注意する必要がある。土器片の多い耕作地では、データパターンが攪乱状に表現されている。

D Cにやや類似したパターンである。

E 他のデータに比べはっきりとした土層境界を呈する。またその範囲もはっきりとして周辺の状況と明らかに異なる。ただしその表現が薄いことが遺構としての条件にあてはまらないともいえる。

F 土層は3から4段に分かれてみられる。測線25から27に関しては、試掘による土層確認が望ましい。測線22・23付近において、データは一応遺構状表現としたい。

G 土層は比較的表現がよく、各土層とも個別的に平面積を持ち、各面は段差をもつ。5194-1の42測線で盛土、または埋め土のような雑な土層の状況がみられる。

H 神社の丘陵部について、基盤の土層が1.5m付近にみられる。小礫を含む土質と思われる。その他、これといって注目するものはみられないが、頂部付近は一見雑な盛土のようにもみられる。

I データの判断は難解である。田を埋めたようにもみられ、3回程度は盛土されているようにみられる。表土を除いた場合、柱穴、浅い土坑のようなものがあるかもしれない。

J 土層は比較的何回かの積み重ねがあるようにみられる。東側の地籍（5166・5188）においてその変化は大きい。このエリア内で浅い土坑または浅い溝状の存在する可能性がある。

K 全データの中では極めて遺構的な表現が多いが、現地試掘の結果のとおりである。この結果データからいえば、AからJまでの結果について、遺構または遺構状としてあまり断定できないことになる。

L 一部の測線データに遺構状の表現がみられる。全体に2から3段の土層が積み重なってみられる。測線によっては乱雑なパターンと、正常な土層のパターンがみられ、これは普通遺構の可能性を示すものである。

M パターンの表現は盛土状的状況が強いが、積層盛土ではなく、単純な盛土とみられる。

N 丘陵は盛土による岡の可能性がある。盛土は3段以上の積層を呈している。ただし頂部はゴミなどの影響によりはっきりとしない。頂部周辺は金属ゴミの影響が多いが、それでも説明できないデータもあり、詳細な調査を行う必要がある。

O 試掘を要する。

広域農道脇 試掘をする。

学校区 部分試掘をして工事による混入土か、遺構かを確認する必要がある。

第4節 試掘調査の経緯と成果

地中レーダー探査の報告を受け、翌年の平成2年に御屋敷遺跡地内の地点で試掘調査が実施された。

御屋敷地内は当時、ブドウ、桑、梅畠であったが、果樹の間の場所を選んでA～Iの2×5mを基本形とした9か所のトレンチを設定し、遺構確認面まで掘り下げた。なお場所の制約で隨時トレンチ幅を短縮している。

詳細な調査データは不明であるが、調査内容、出土遺物は以下の通りである（第18図）。

Aトレンチは2×5mで、内外面鉄釉掛けの塊片1、瓦質火鉢片1、近世陶器片2、内耳土器片2のほかは土師質土器皿の小片20点程度がある。

Bトレンチは2×5mで、幅50cm程度の斜めの溝状遺構を確認したが、掘り下げは行っていない。内外鉄釉の塊片1、土師質土器皿の小片7点程度がある。

Cトレンチは2×4mで、近世～近代磁器皿片3、内外鉄釉の塊片1、火鉢状の黒味のある土器片4、須恵器あるいは渥美類似の中世陶器塊片1、近世の燈明皿片1、内耳土器片7、土師質土器小片19点、土鈴片1である。

Dトレンチは2×5mで、鉄釉擂鉢片3、近世尾呂茶碗片1、鉄釉塊片2、近世磁器片2、土師質土器小片16がある。

Eトレンチは2×2mで、近世磁器碗皿片2、尾呂茶碗片1、土師質土器皿小片78など、土師質土器が目立つ。

Fトレンチは2×5mで、近代陶磁器片3、鉄釉塊片1、不明土器片3がある。

Gトレンチは2×5mで、近世近代陶磁器2、土師質土器皿片2、不明土器片1がある。

Hトレンチは1.5×3.5mで、近世近代陶磁器片3、土師質土器皿小片10、不明土器片4、寛永通宝1がある。

Iトレンチは2×4mで、1m四方の不整形な集石が確認された。礫の大きさは5～25cm程度で、10cm程度の礫が多い。礫群の断割りは行っていないが、検出状況では平面的にみえる。礫に混じるようにして土師質土器皿が出土していることから、何らかの遺構とみられる。出土遺物には近世近代磁器片13、近世陶器片1、土師質土器小片78、形のわかる土師質土

器皿1、不明土器片数点、泥人形1（ウサギ?）があり、土師質土器片が多い。1は口径13.8cm、器高2.8cm、底径7.4cmの皿で、底径が大きく、ロクロ目は顯著ではない。特徴としては色調が橙白色で、底径が大きく角の張り出しが強く、胎土に砂粒を多く含む等があり、14世紀代と考えることができ、戦国期の底部角がやや丸い赤みのある皿類とは区別することができる。

このように、各トレンチの状況からは明確な館跡または寺院に関連した遺構は確認できなかった。出土遺物をみると、内耳土器は15~16世紀代の一般的なものとみられるが、Iトレンチ1の土師質土器皿は14世紀

代に遡る特徴がある。また10世紀前半以前の甲斐型土師器や11~12世紀の足高高台、柱状高台坏皿など13世紀以前に遡る遺物は見出すことができなかつた。また戦国期と思われる赤みのある土師質土器片も多数存在することから、16世紀後半までの皿はあるとみてよい。17世紀以降は、陶磁器類があるものの、土師質土器（かわらけ）には確実例がない。したがつてこれらの資料は14~16世紀代を主とする遺物群といえ、義清館跡に伴う遺物はなく、中世、14世紀以降の平塩寺および天正壬午の徳川方の施設に関わる遺物群とみておきたい。

第5章 古城山城跡とその周辺

第1節 古城山城跡の研究史

古城山について『甲斐国志』には次のようにある。「一古城山 峨ガ岳ノ西ニ続キタル山ナリ最モ高キ頂ニ烽火台ノ址アリ河内ヨリ櫛ヲ伝フベシ南ハ山家村其ノ南ニ岩間宿ヲ眺ス府中ノ正南ニ中レリ伝ヘ云フ武田ノ時ハ跡部藏人ナル者警衛セリ宝聚寺ニ藏人ノ墓アリ

天正壬午ノ時ハ大須賀ヨリ守兵ヲ置クト云フ西ノ方野中ヨリ樵蹊アリテ登ルヲ嶺路ト云フ烽火台ヨリ少シ北ニ下リ松林中ニ方六七十間一重ノ星アル処ヲ義清ノ要害本城ノ迹ナリト云フ即チ平塩岡ノ上頂ニテ高サ十余町許リ瓦甃ノ歓破レタル砂石ニ雜リ多ク見エ屋瓦ニハ非ズ中将屋敷・地蔵峠・仏岩寺平方八九十間平地ナリ立石界石ナリ長七八尺地名ニモ呼ベリ里老ノ伝ヘニ上古平塩寺ハ此處ニ在リシヲ山下ニ移セリ故ニ平塩ニ存セル小堂ヲ今モ峯仏ト称ス御念仏ニ作ルハ誤ナリト云フ前ニ云フ白雲寺ノ名ニ粗協ヘリ南面ハ山家村ヨリ東河内領ノ岩間・窪・大磯小磯・根子等ヘ自在ニ通ジ嶺通り東ハ中郡九一色ノ古関・精進ニ至ル富士ノ方ニ蹊アリ」

ここではまず山頂烽火台跡のこと、続いて北に下ったところの義清の要害本城跡のことを述べ、平塩寺がもとこの城跡にあったこと、山道は周囲の村々や富士の各方面に通じていることを記している。ここで注目すべきは、山頂の遺構を烽火台と断定していること、烽火台には武田時代に跡部藏人が警護し、天正壬午(1582)の際に大須賀五郎左衛門の兵が守ったとの伝えを記す一方、古城山城跡については武田時代、天正壬午の際の伝えについて記しておらず、源義清の要害本城と伝えられる、といった曖昧な記述に留まっている点である。瓦とは異なる破片が多く散布する、といった内容であり、城跡に関する伝承が烽火台に比べて不

確かである。

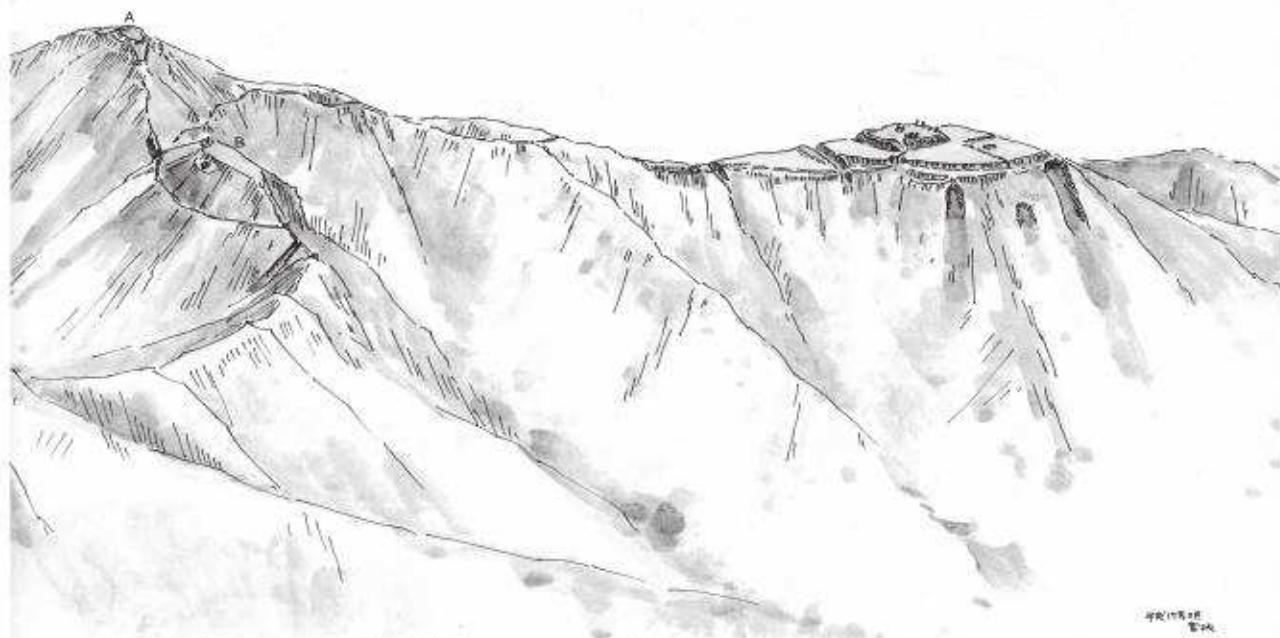
この古城山城跡は甲斐国内における本格的な山城の一例として注目されてきたが、ここでは今日に至る研究史を追ってみたい。

まず嚆矢となるのは、1980年の『日本城郭大系』の「古城山の砦」(出月 1980)である。

「古城山の砦 国鉄身延線市川本町の南2kmに古城山の砦がある。市川の地は、源義清が市河莊の莊官として土着し、甲斐源氏の発展の第一歩をした所で、平塩岡には義清の居館があったと伝えられている。その平塩岡の南にそびえる古城山の峰は、地理的にみて、甲府盆地と旧河内領（中富町・六郷町以南の富士川流域）と境を接する要點にあたる。(中略) 砦の遺構は、古城山北側中腹の松林の中にあって、残存状態は良好である。土壘を東・南・西の三方にめぐらせた東西約15m、南北約25mの主郭は、北に向かって延びる尾根上に西側に偏して設けられ、周囲より一段と高くなっている。主郭の周りには、傾斜が急となる西側を除いて、幅10~15mほどの腰郭が配置されている。この腰郭は東北部分で高さを50cm前後減じており、この部分に直径1m余りの窪んだ湿地がみられるが、井戸か水溜の跡かと思われる。南側腰郭の先に幅3~4m、深さ1.5mの尾根を切断する空堀があり、尾根の根方にもさらに1か所堀切がある。

この古城山の砦は義清の要害であるとも、また上古に平塩寺があったとも伝えられている。しかし、現在みられる遺構からは、そうした性格はうかがえない。むしろ、立地や構造的な面から戦国期的な色彩が濃く、主郭の土壘が北側ではなく、南側で高さを増していることや、堀切などのあり方は、山道の通る南側に対しての防備に重きが置かれていたことを示すようである。

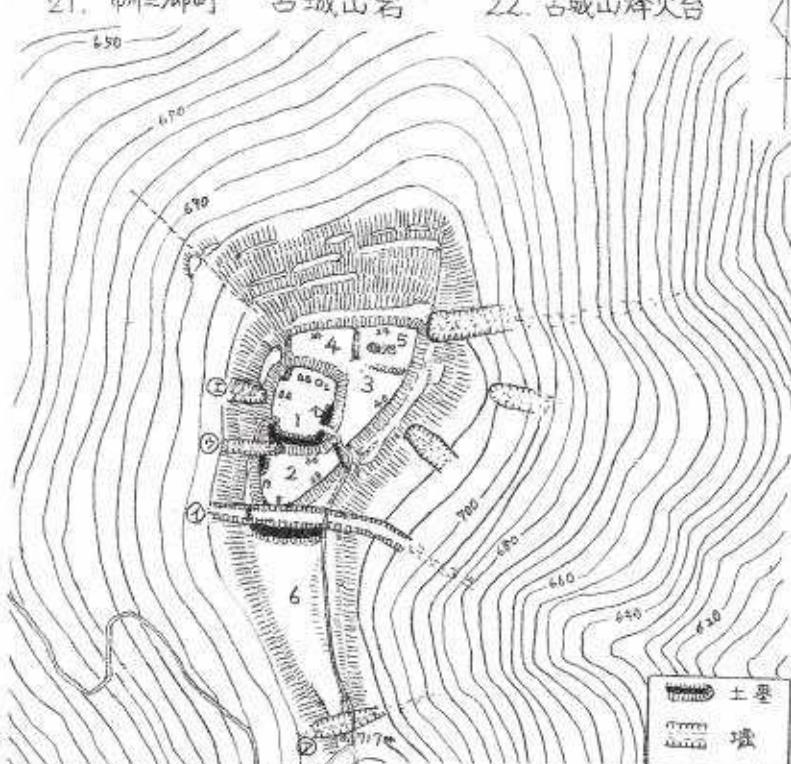
市川三郷町 古城山砦・烽火台



21. 市川三郷町 古城山砦

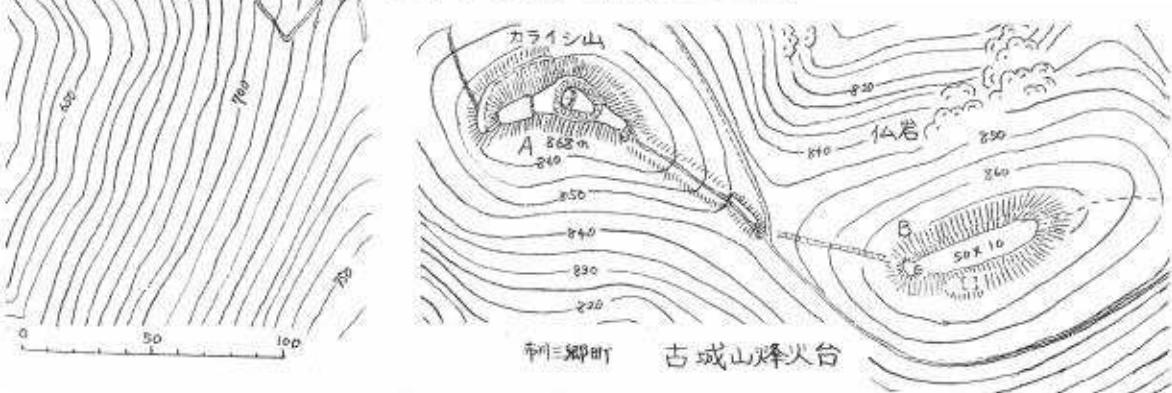
22. 古城山烽火台

第10図 宮坂武男氏による鳥瞰図
(宮坂 2006)



第11図 宮坂武男氏による古城山砦
見取図 (宮坂 2006)

第12図 宮坂武男氏による古城山烽
火台見取図 (宮坂 2006)



ここを通る市川からの山岳路が当時、重要なルートの一つであり、これを押さえるために置かれた砦であるように思われるが、さらに検討を要する。(後略)

ここで出月洋文氏は初めて城跡と烽火台の位置および略図を図示し、遺構の状況から戦国期的な色彩が強いこと、山道が通る南側に重きを置いた防備が認められることを指摘したうえで、重要な山岳路を押さえるための砦であったとする性格付けを行っている。

1988年の試掘調査のうち、会議資料として概要が報告されたほか、全体図は『山梨考古』等に提示され、若干の説明が加えられている。また同じ頃刊行された『底本 山梨県の城』には、調査成果を踏まえ、以下のように記載された(萩原1991)。

「古城山砦 西八代郡市川大門町古城山に位置する戦国期の山城で、付近の山頂に烽火台を持ち、一体となって存在する。(中略)

古城山砦は、現在でも松林の中に良好な遺構群を残し、その全容もある程度明らかにされているが、縄張や構造からこの近辺で中心的役割を演じた城郭であることが知られる。(中略) 北及び東側には細長い帯郭が巡っており、特に北側斜面では三段に連なる。また、ここには、帯郭のほかに腰郭状の小さな平坦面も連続して付設され、このほかこの方面的防禦に意を払っている様子が読みとれる。反面、主郭の西側には帯郭がまったく見られず、対照的な様相を見せている。なお、登山道のすぐ脇に、尾根を断ち切るような形でV字形を呈した幅7.5mの堀切が存在し、城域を示唆している。

(中略) 調査そのものはトレンチ調査による短期間の試掘調査であったために、全容の解明には至っていないが、郭群から掘立柱建物址を推定する柱穴群などとともに、石鉢片や少量のかわらけ(土師質土器)などの遺物が検出された。これらの出土遺物の状況から、多数の軍勢の常駐を想定することは困難であり、ほかの多くの山城と同様に、軍事的緊張時に使用される性格のものであったことがわかる。

古城山砦に見られる縄張・構造は、随所で戦国期的特徴を顕著に示しており、『甲斐国志』が伝承として取りあげる源義清の要害説は採ることはできそうにない。平塙寺の旧跡とする根拠も認められず、やはり、重要な街道筋の防禦のために戦国期に営まれたとする『日本城郭大系』の見解がおおかたに支持されよう。(後略)

ここでは縄張・構造から戦国的特徴を示し、義清の時代に遡るものではないこと等を指摘する。

2001年には山梨県考古学協会により「研究集会 武田系城郭研究の最前線」が行われ、資料集が刊行された。その中で「古城山砦」として櫛原が紙上報告した。「古城山砦 (前略) 1988年の調査によると、古城山城跡は中央の方形を呈したI郭を中心に周囲にII~V郭が囲み、東西斜面には堅堀5本、北・東側に帯郭4本と腰郭9本が配置し、南側山道との間には2本の堀切がある。郭や堀切の配置・規模は本来の自然地形を生かしたものである。土星はI郭南側と1号堀切南側に存在する。城に至るルートとしては南側の登山道から堀切を越えて入るルートのほか、北西側からII郭に至るルート、北東側からV郭に取り付くルートがある。なおI郭内には明治以降、富士講のひとつ大我講による記念碑等が11基立てられている。遺構としては、III・IV・V郭内で小ピットが11本程度検出された。遺物には中世の所産かと思われる八弁の菊花文を押捺した陶器甕、かわらけ片、石鉢片のほか近世陶磁器、銭貨があるが量的には少ない。平安時代以前の遺物は皆無であることから、義清館の要害説は可能性が低いといえる。

(中略) 北側に帯郭、腰郭が多く配置し、また北側より城に至る2本のルートがあることから、天正壬午の折に甲府側に対する防備のための改修が加えられていることが予想される。城跡形態からは土星を伴い、堅堀を多用する特徴から武田時代の構築と考えられる。(後略)

ここでは北側に帯郭、腰郭が多用されている点を北側重視の防備とみて天正壬午での改修とみたが、確証があつての推定ではなかった。

中部地方各地の山城を踏査している宮坂武男氏は、その著書の中で古城山城跡について次のように記している(2006)。

「古城山砦 城主・城歴 (前略) この砦を義清の要害とするのは無理があり、平塙寺の旧跡とあるが、その根拠が今のところはつきりしない。仏岩の上の平についても同様で、今後の問題となる。

この城山の砦は、その造りから見て本格的な戦国期の砦であることは確かで、その跡地に浅間神社を祀り、信仰の山としたことが考えられる。

城跡 主郭1は南北29m、東西南辺18m、中央部22mのほぼ長方形をしていて、南側に高さ1m強の土星がコの字形にある。往古はことによると全周していたのを削平した可能性はある。周囲の壁は4~5mで、これを取り巻いて南から東、北へかけて2、3、4、5の曲輪が取り囲み、5には天水溜めと思われる池が

ある。1の虎口は東、西、北西隅の3カ所にある。2、3、4、5の各曲輪の外縁は3~4mの切岸があり、その下に2~3mの腰曲輪状犬走りが北と東に残る。

2の南の平坦な尾根は上幅9m、幅平均7mほどの長大なイの堀で遮断し更に70m南の尾根の挟まった所を上幅7mのアで掘り切っていて、ここが砦の南限となる。

北の斜面には、幅2mほどの削平地が3~4段認められ一応の備えはしている。また登路のある西の斜面にはエウの堅堀があるが、これは登路の虎口にかかるものとも見える。東斜面の堅堀状地形は自然のもので、放射状の堅堀とは異なるものと思われる。しかし単なる烽火台ではなく本格的な山城の造りである。

以上のようにこの砦は、6は自然地形であるが、南の後背部への備えがしっかりしていて、単なる詰城としてのものではなく、この山越えの間道の押さえとしての砦であったことを伺わせている。」

宮坂氏が古城山城跡を「本格的な山城の造り」と評価する点は、複雑な郭配置と多数の堅堀配置が韮崎市の白山城跡などの事例に通ずる点であろう。

第2節 古城山烽火台跡に関する研究史

山頂の古城山烽火台跡については、「日本城郭大系」(出月1980)に以下のようにある。

「(前略) 頂にある烽火台は、遺構はあまり顕著ではないが、ここからは北に甲府盆地が一望のもとに開け、南側は切石あたりまでの河内地方の山野が視野に入り、甲府と河内との接点にあたる烽火台といえる。なお、「甲斐国志」には、武田氏の時代には跡部藏人という人物が、この烽火台の守備にあたっていたこと、また天正10年(1582)7月の徳川氏入甲の時には、先発として市川に駐屯していた大須賀五郎左衛門の陣営から守兵が出されていたことなどがみえる。どちらについても事実を確認しうる史料はないが、単に烽火台の守衛のみでなく、砦と烽火台の一体化した経営がなされていたものと思われる。」

『山梨県の中世城館跡』(1986)には、「砦の南方500mの烽火台の所には、戦前までは烽火台の石組みや石垣があったと伝えられるが、現在は見られない。」と記すが、出典は不明である。

1988年の古城山城跡調査の折に烽火台跡についても略図を作成し、2001年の『武田系城郭の最前線』古城山砦の項で提示し、次のような若干の説明を加えた(柳原2001)。

「(前略) 古城山烽火台は古城山山頂にあり、古城山

城跡とは直線距離で600m離れている。山頂部に4×6mの塹状の盛土部をもつI郭があり、一番低いところにII郭がある。I・II郭を囲うように帶郭が巡り、山道は東西に取り付いている。この形態は平瀬の烽火台跡、一宮町旭山の烽火台跡と比較的類似していることから、武田系烽火台として理解されるかもしれない。」

平瀬、旭山の烽火台との類似性については、なお検討が必要であり、「武田系烽火台」として類型化する点については慎重にならざるを得ない。

『定本 山梨県の城』(萩原1989)では以下のように記し、湯村山城との烽火の中継関係を指摘している。

「烽火台は、『甲斐国志』の湯村山城の項でも、「五里余ニシテ八代都市川城ガ岳ノ雲火峯正南ニ対向セリ」と記述されるように、甲府湯村山城と盆地を挟んで対峙していたといわれ、甲府と河内領の境を占める地理的状況から、烽火台のなかでも重要な役目を果たしていた様子がうかがわれる。跡部藏人や大須賀氏の動きが、何に依拠したのか明らかではないが、天正壬午の戦いに守衛兵が置かれたという伝承を有することは、この砦と烽火台の役割を考えるうえで重要である。」

また宮坂武男氏は、古城山烽火台について次のような見解を明らかにしている。

「烽火台 この烽火は条件が良ければ府中まで見えたはずであり、重要なものであったと考えられる。その位置は復元されているのはBの山であるが、現地の様子からすると、その西の通称カライシ山の方を考えたい。Aの山頂は13×8mほどで塹状のマウンドがあり、東西に削平地が認められる点で、簡単な砦の態をなしている。」

Bの東の鞍部には土橋の両側を削り取った堀形があり、A、Bの間の鞍部は閑門としてここに備えがあつたとも考えられ、砦と共に道を押されたものと思われる。」

そのほか、『市川大門町誌』には大寄友右衛門が天保10年6月に烽火台上に大碑を立てて富士浅間明神を奉祀したことで里人が烽火台を「お浅間さん」と呼ぶようになった、と記しているが、これは古城山城跡のある御浅間林の富士講碑との事実混亂であろう。

山梨県内での烽火台跡については『白山城の総合研究』のなかで八巻與志夫氏が整理している。八巻氏によれば県内には450箇所ほどの中世城館跡があり、うち烽火台、鐘突き堂の伝承地をもつ小規模城郭は130箇所余りあるという。

『甲斐国志』山川部第十五の「城山」の項には「鴨狩村ノ山上ヨリ此ニ達シ此ヨリ市川ノ城山ニ達スト云」とある。また「城山」に関しては、同じ『国志』古跡部第十五の「城山 寺所村」に記述がある。

「本村ノ南岩ノ下村ノ北ニ在リ岩山峙立シ山ノ頂平ナル處十四五間ニ二十間許リ里人馬賈場ト名ク烽火台ナリ市川ノ郷故城山ヨリ相伝ヘテ鴨狩ニモ又城山ト云フアリ（後略）」

ここでいう「市川ノ故城山」とは古城山烽火台のことである。萩原氏の指摘する『国志』湯村山城に関する「五里余ニシテ八代郡市川城ガ岳ノ雲火峯正南ニ対向セリ」との記載と合わせると、鴨狩、城山、古城山から湯村山へと、甲府盆地を南北に飛び越えて府中へと中継するダイナミックな烽火の経路が復元できる。

第3節 古城山城跡および周辺の調査方法

古城山城跡では、平板実測による全体図作成および各郭内でのトレンチ調査を行った。

まず城跡内のヤブ払いを行い、見通しを良くするとともに遺構分布状況を確認した。平板測量をするにあたり、城跡内にグリッドを設定し、10mごとにいくつかの杭を打設して基準点とし、50分の1の図を数枚作成してつなぎ合せた。標高については城跡入口の登山道脇に四等三角点が設置されていたため、そこから移動した。調査は遺構確認面までジョレン・移植ゴテ等により掘り下げて遺構の有無を調べ、遺構の広がりが予想された地点については、トレンチの拡張を行った。また土壘、堀切についてはトレンチを設定して土層観察を行った。また城跡内に残る富士講碑の調査もあわせて実施した。

古城山烽火台跡については、略図作成、周辺踏査による遺構確認にとどめた。そのほか、古城山城跡、烽火台跡周辺で、登山道周辺を中心に関連遺構の有無を確認したところ、城跡北側の尾根で比較的大規模な堀切が新たに見つかった。

第4節 古城山城跡の遺構

城跡（第13図）は、烽火台跡がある山頂ピークの北側550mに位置し、烽火台とは比高差140m下がった位置にあり、また平塙の岡からは直線距離で約1.5km、比高差にして450m上がる（第3図）。烽火台跡と城跡は同じ尾根続きにあり、山頂に烽火台、平塙の岡に下った近い尾根上に城跡が立地し、両者を直線的に四尾連道がつないでいて、三者はほぼ南北の直線上に配置している。このことから居館と要害という関係を想

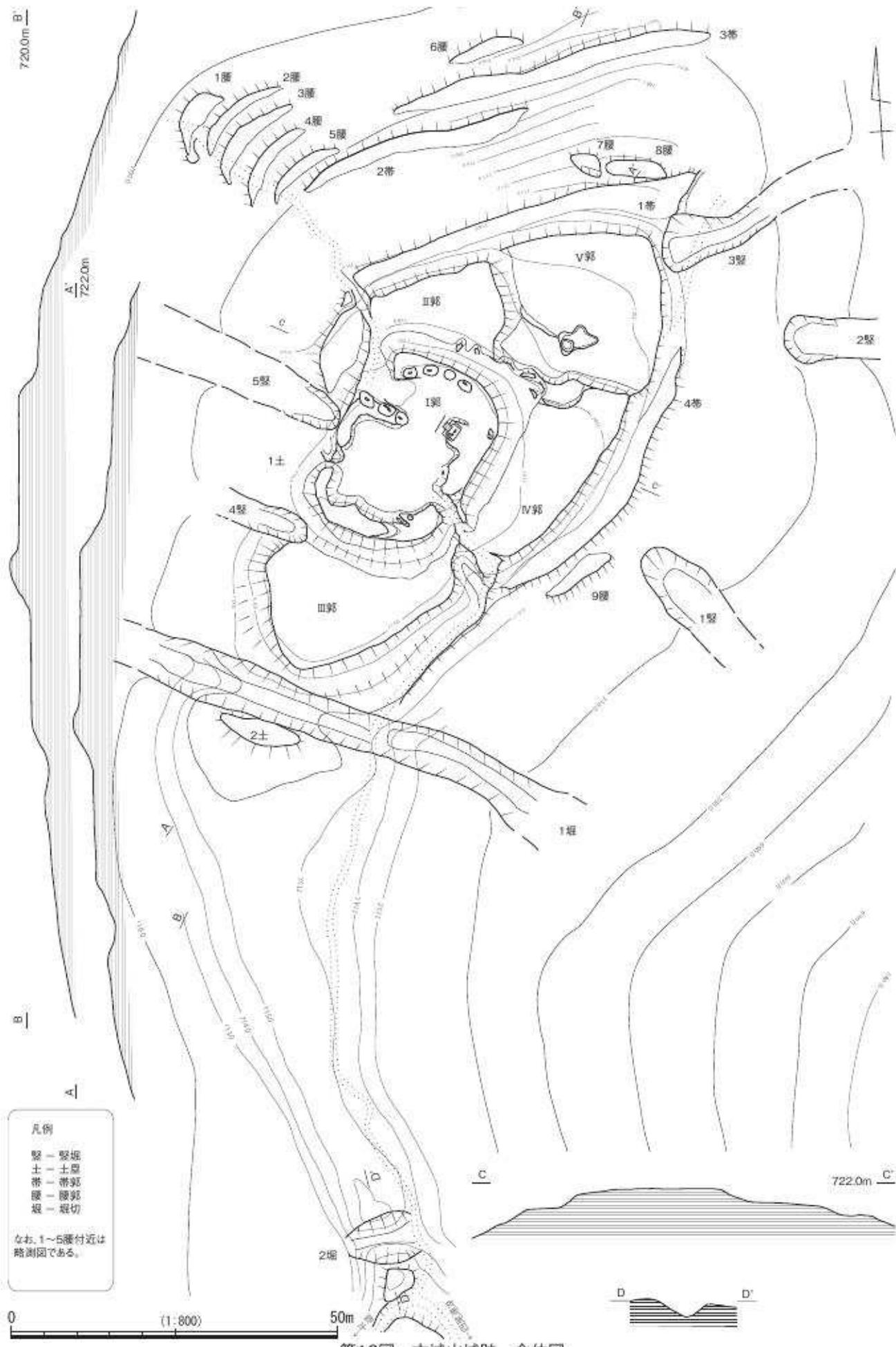
起するのはごく自然な発想といえる。

烽火台跡への登山道（第3図）は、かつては尾根道の利用を基本としていたと考えられるが、現在では尾根脇の迂回路が用いられている。集落域からの登山道としては四尾連道のほか、西側に金比羅神社を経由する道があり、これは石龕の下付近で四尾連道と合流している。古城山城跡には少なくとも4本の尾根が城跡のピークで合流しているが、現在城跡に至る四尾連道はその西端の尾根にあたり、平塙寺西側を区切るとされる鳴沢川上流に沿って設定された尾根道を基本路線としたものである。

城跡と烽火台跡をひとつのセットとして捉えると、烽火台跡の東、約300mの尾根道沿いに道の両脇に堅堀を入れて土橋とした遺構がある。城跡からは直線距離で700mの位置にあり、南限を区切っている。また城跡から直線距離で400m下った尾根には、やはり細長く伸びた尾根の根元に大規模な堀切を行い、土橋とした遺構が存在することがわかった（第3図）。場所はちょうど鳴沢川の源流にあたり、沢の水流によって尾根が谷状に浸食を受けた地形を利用して堀切が造られたものである。この地点を城域に取り込むことで、水に対する備えとなる。したがって山城を中心につたつの堀切を設定し、四尾連道を南北で遮断するような諸構造が配置されていて、その間を城域として山城と烽火台を配置するという念入りな計画性を窺がうことができる。

城跡（第13図）の構造としては、まず登山道に隣接した細い尾根を2号堀切で遮断し、さらに2号堀切から約200m離れた同じ尾根続きを1号堀切で大規模に分断することで、郭域を定め、1号堀切の北側200mの範囲に、主郭を中心に4つのテラス群を巻くように構築している。郭域（第14図）は尾根がふくらんで小ピークをなす地形を利用したもので、最も高い部分を主郭（I郭）とし、北側に2面（II・V郭）、東側に1面（IV郭）、南側に1面（III郭）の郭を設定する。また放射状の堅堀を少なくとも4本（宮坂氏の観察では5本）入れている。西側に2本、東側に2本（もしくは3本）で、1号堀切も両端が堅堀状をなすことから、北と南側を除く東西両面に堅堀が張り巡らされた状況となる。

また東面と北面には2本の細長い帶郭がある（1・4号帶郭）。それらはII・IV・V郭を防備するように設定され、さらに北側斜面には2本の帶郭（2・3号帶郭）および付随する8箇所程度の小規模な腰郭が連続し、また東斜面にも1箇所の腰郭が認められる。そ



第13図 古城山城跡 全体図

の他の傾斜面には腰郭が確認されないことから、腰郭は北側斜面に特徴的といえる。

郭域は、卵形を呈した自然地形を利用するため不整形なプランとなっているが、主郭のみ長方形、もしくは方形を意識し、そのほかの郭は不整四角形や三角形となっている。土星は主郭の北辺を除く3方にコの字状を呈して遺存するが、よく観察すると、I郭内が方形の土星で囲まれた南側と、出入口にあたる土星をもたない北側に2分されているようにみえる。土星は南と西側が高くなっている良好に遺存するが、北辺にも当初は土星が存在した可能性は指摘されていて、I郭全体を本来土星が巡っていた、という見方もでき、富士講碑の建立のさいに削平、整地された可能性もある。土星は南東隅寄りの東辺と、南西隅に近い西辺が切れているほか、北西隅部分が登り口として傾斜している。ちょうど、北側尾根を上り詰めるようにしてかすかな山道がII郭北西隅から主郭北西隅に取り付いているが、後述する富士講碑の列が通路両脇に並んでいて、正面に浅間社を祀る構造となっている。したがって、この城跡に至る進入路としては、北側斜面の尾根ルートが使われたのではないだろうか。したがって、ここではI郭内が2つの構造からなっていたとみておきたい。そのほか、土星としては1号堀切南側に存在している。

郭域への進入路としては、南からの登山道からの道、北西側から主郭北西隅に至る尾根道に加えて北からの尾根道がある。このうち南ルートは2号、1号堀切を越えてIII郭裾からIII・IV郭の間を通って主郭南西隅に至るルートで、1・2号堀切には土橋はなく、道としては明確な痕跡をもつものではない。また1・2号堀切間は約200mあるが、自然の尾根地形をそのまま残していく郭域外という印象を与えていている。北東側の山道は3号堀切を横切るものであることから、後世のものかもしれない。ただし北尾根については未踏査であるが尾根道の存在を想定できるので、1号帶郭からV郭への進入路を設定できる。また北西からの道については、山道が1号帶郭の西端を横切ってII郭に進入し、I郭北西に至っているが、1号帶郭、II郭をそれぞれ切り込むようにして道が造られているのは富士講碑搬入にともなう整地の可能性もあるが、本来のI郭に至る尾根道があったと考えるべきで、大きな石碑の搬入が行われたことが示すように、この北西尾根筋にはI郭に最も容易に辿り着くことが可能な地形的要因があるものとみられ、古道の存在を想定しておく。

以上をまとめると、郭域には郭5面（I～V郭）、

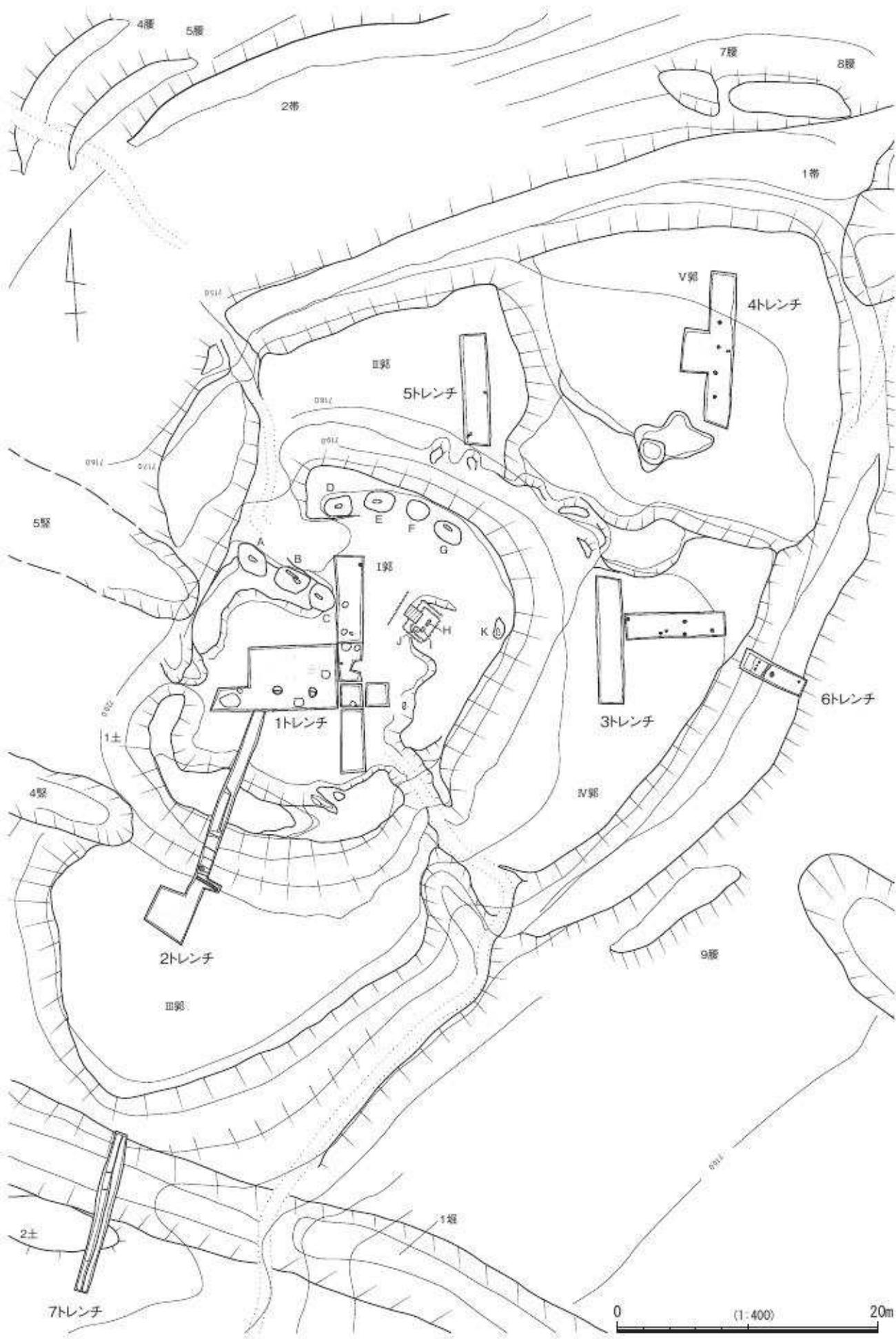
土星2箇所（1・2号土星）、堀切5本（1～5号堀切）、堀切（横堀）2本（1・2号堀切）、帶郭4本（1～4号帶郭）、腰郭9箇所がある。土星を巡らす主郭を中心に4つの郭が取り巻き、東西側に堀切を多用した城郭といえる。郭域に至る山道には3本のルートが認められるが、道としての痕跡はいずれも不明確で、また虎口の遺構もはっきりしない。次に各施設の説明をする。

I郭－本城跡の主郭。28.5×20mの南北にやや長い長方形を呈し、その向きは地形に従い東傾斜している。標高721mを測り、郭内は平坦である。南側には東・南・西側に、幅約4.5m、高さ1.5mのコの字状の土星が遺存する。北側にも卷いていた可能性があるが、現状では認められない。南側石碑列の部分で方形に囲う土星の痕跡がわずかに認められることから、I郭南側を20×18mの範囲で方形に囲う土星の存在を想定しておく。出入口は北西側と南東側の2箇所で、現在北西側からの入口には大我講の富士講碑群が2列配列する。郭中央やや北東隅寄りに西面する石碑の前には木造の浅間社の社殿がある。調査時点では無事であったが、現在では倒壊している。石碑群は祠を中心にその参道にあたる通路両脇に北列は南向き、南列は北向きで配置されているが、現在ではそれらのいくつかが倒れている。それらの石碑は高さ82～124cmと大型で、現地で刻んだものではなく、下から運んだものと考えられる。郭内に搬入のためのルートが整備されたことが考えられ、北東隅からの進入路に関しては改変された可能性も考えておくが、虎口の可能性が高い。南東側からの出入については、III・IV郭間に小規模な堀切状構造があり、その部分が通路状を呈していることから、当初からの通路とみられる。

II郭－I郭の北側、V郭の西側に隣接する。28×6～13mの不整長方形を呈し、郭内は平坦である。北西側からの進入路のために郭が2分されているが、これは後世の改変とみてよい。南側のI郭とは比高差2.0m、東側V郭とは1～2mの段差が形成されている。V郭との連絡はII郭南東隅に段差がほとんどない傾斜面があることから、出入口とみられる。

III郭－I・IV郭の南側に隣接する。28×19mの丸味のある三角形を呈し、郭内は平坦である。北東側にIV郭との出入口が設けられ、2つの郭の境として小さな堀切状の掘り込みで通路幅を狭めている。また南側には1号横堀、西側には1郭との境を切るように4号堀切が存在する。

IV郭－III郭とV郭の間に挟まれた郭で、28×11m



第14図 古城山城跡 郭域

の不整長方形を呈し、わずかに東側に傾斜しているがほぼ平坦である。I・III・V郭と隣接するが、I郭とは約2mの比高差があり、V郭とは1~2mの段差をもち、III郭とはほぼ同一レベルである。南側にIII郭との出入口が、北側にはV郭との出入のための低い段差が設けられている。東側の斜面には細長い4号帶郭があり、それに伴う腰郭も1箇所存在する。さらに東側3.5m付近には1号堅堀がある。

V郭-II・V郭に挟まれた22×21mの不整方形を呈し、郭内はわずかに南東に傾斜するが、ほぼ平坦である。南西隅でII・IV郭と接し、両郭への出入口をもつほか、北側には郭外からの進入路がある。南西寄りに不整形の凹地があり、その中に直径2m、深さ50cmほどの円形の窪みがあって絶えず水が溜まっている、イノシシ等の「ヌタ場」となっている。II郭との段差は1.5~2m、IV郭とは1~2mを測る。東側斜面にはIV郭斜面から続く4号帶郭がある。また北西角にあたる斜面に3号堅堀、東側斜面の1・3号堅堀間に2号堅堀がある。

1号土壘-I郭内南側に構築された幅9m、長さ19m、高さ1.4mのコの字形の土壘であり、土壘上部でのIII郭面との比高は3.2mを測る。『甲斐国志』に「一重ノ星」と記載されており、土壘が北側にも巡っていた可能性とともに、北側を虎口にあたる空間とし、南側に方形の土壘が巡っていた二分構造の可能性がある。

2号土壘-1号堀切南側にあり、長さ12m、幅4m以上、高さ約1mで、1号堀切底面からの高さは1.2mである。

1号堅堀-IV郭東側にあり、東へ延びる。幅6~8m、長さ不明。

2号堅堀-1号堅堀北側、V郭東側にあり、東へ延びる。1号堅堀とは約35m離れている。幅6~7m、長さ不明。

3号堅堀-2号堅堀北側、V郭北東角にあり、北東へ延びる。2号堅堀とは13m離れている。幅5~8m、長さ不明。

4号堅堀-I郭とIII郭の境に位置し、西へ延びる。幅4m、長さ不明。

5号堅堀-I郭西、II郭西端に位置し、西へ延びる。4号堅堀とは13mの距離を隔てている。幅4~5m、長さ不明。

1号堀切-III郭南側に接する深さ1m、幅6~7m、長さ70m以上の大規模な堀切（横堀）である。南側には堀の土砂を盛り上げた2号土壘が存在する。東西

端部は堅堀状に斜面下方へと延びているが、正確な長さは不明。1号堀切とあわせて尾根を2重に分断していることから、南側に対する強固な防禦意識が窺える。

2号堀切-四尾連道北側、道のすぐ脇にあり、南北に延びる尾根の根元を長さ13m以上、幅8m、深さ2m以上でVの字状に分断する。東西の端部は堅堀状に斜面を下っている。

1号帶郭-北側斜面のII・V郭北側にあり、長さ54m、幅2~5mを測る。II郭とは比高差約2m、V郭とは1~2mとなる。斜面下方に2・3号帶郭がある。

2号帶郭-北側斜面、1号帶郭下方、15mにあり、長さ35m、幅2~3mである。2郭とは比高差6~7m。下方に1~5号腰郭が連続的に存在する。

3号帶郭-II・V郭北の北側斜面にあり、1号帶郭から18m隔てる。長さ50m、幅2~3mで、下方に6号腰郭がある。V郭とは比高差11~12mである。

4号帶郭-東側斜面のIII・V郭東側にあり、長さ48m、幅2~3mを測る。IV郭との比高差は2~3m、V郭とは1~2mである。

1号腰郭-II郭北側の北東斜面にある5本連続した腰郭のうちの最も下の段にあたる。長さ約10m、幅3m。なお、第13図の1~5号腰郭付近は実測作業ができなかったため、概略図である。

2号腰郭-II郭北側腰郭群のうちの2段目。長さ15m、幅約2m。

3号腰郭-II郭北側腰郭群のうちの3段目。長さ約15m、幅約2m。

4号腰郭-II郭北側腰郭群のうちの4段目。長さ約14m、幅約2m。

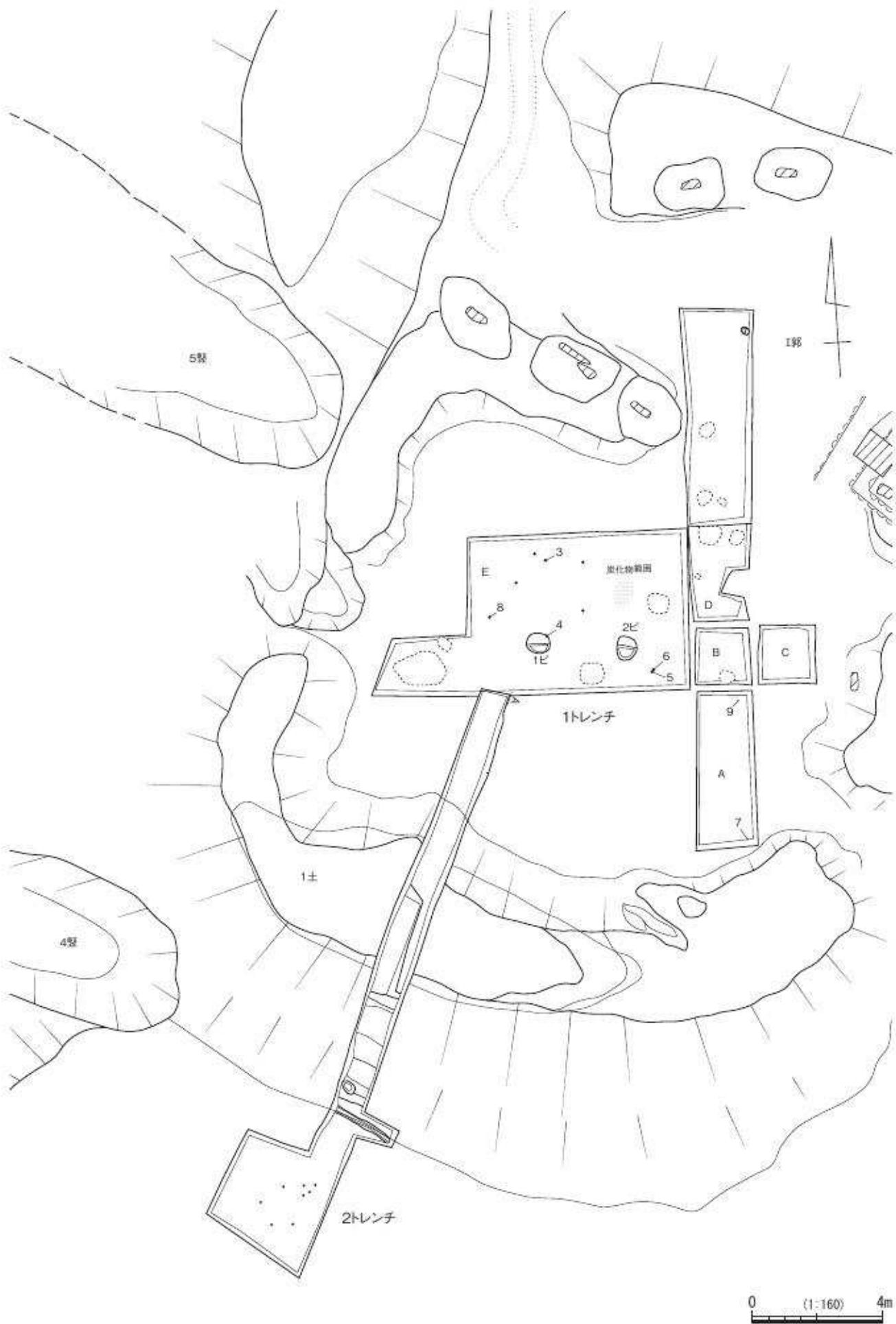
5号腰郭-II郭北側腰郭群のうちの5段目。2号帶郭の直下にあたる。長さ約12m、幅約2mで、II郭とは比高差約10m。

6号腰郭-北側斜面の3号帶郭直下に位置する。長さ12m、幅2mで、V郭とは比高差13~14m。

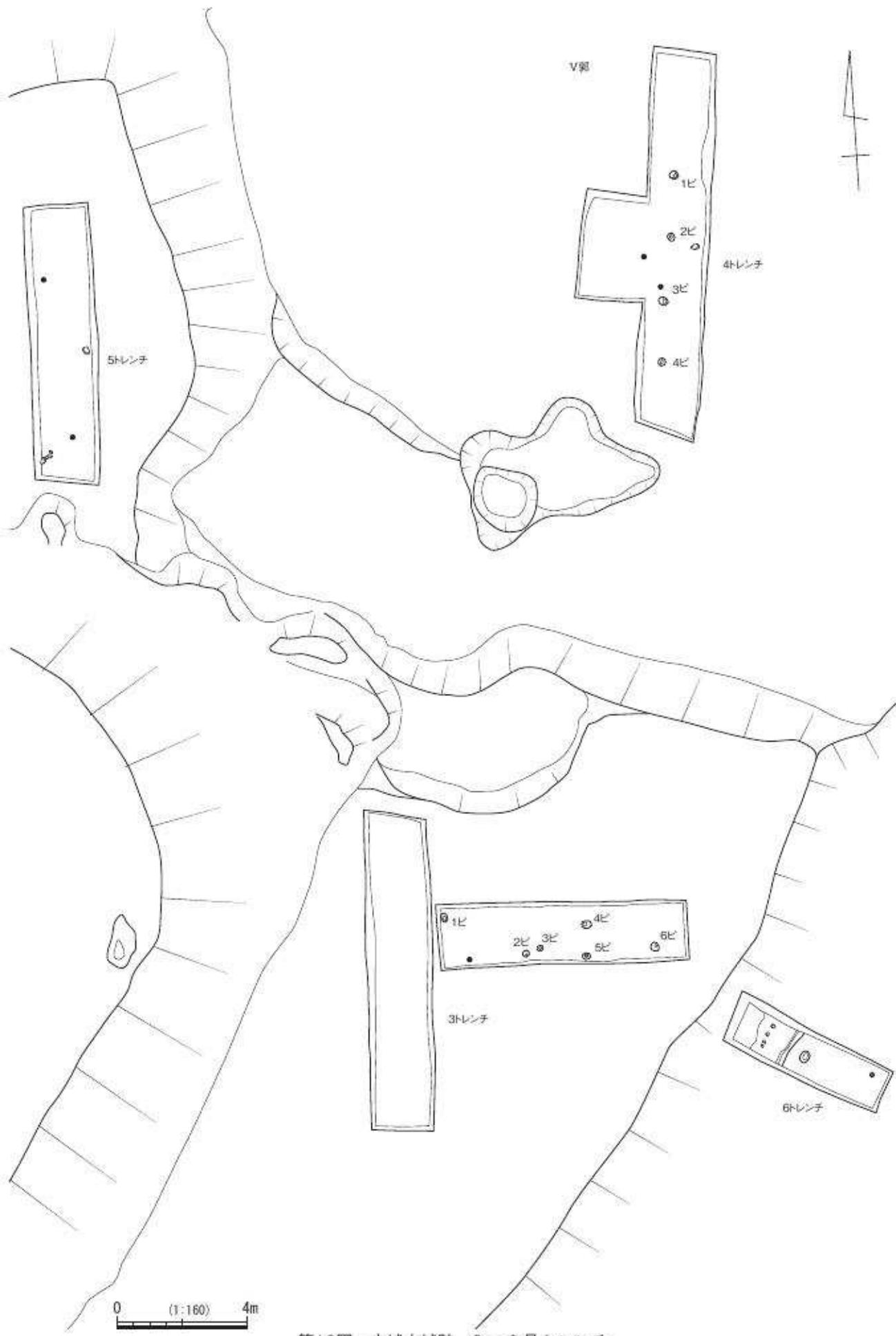
7号腰郭-北側斜面の1号帶郭下にあり、8号腰郭の西側に位置する。長さ4m、幅2mのごく小規模で、8号腰郭と一体のものとして把握すべきかもしれない。

8号腰郭-北側斜面の1号帶郭直下にあり、長さ9m、幅2mをはかる。V郭とは比高差3~4mである。

9号腰郭-東側斜面のIV郭東側にあり、4号帶郭の直下、1号堅堀脇にあたる。長さ6m、幅2m。IV郭とは比高差3~4m。

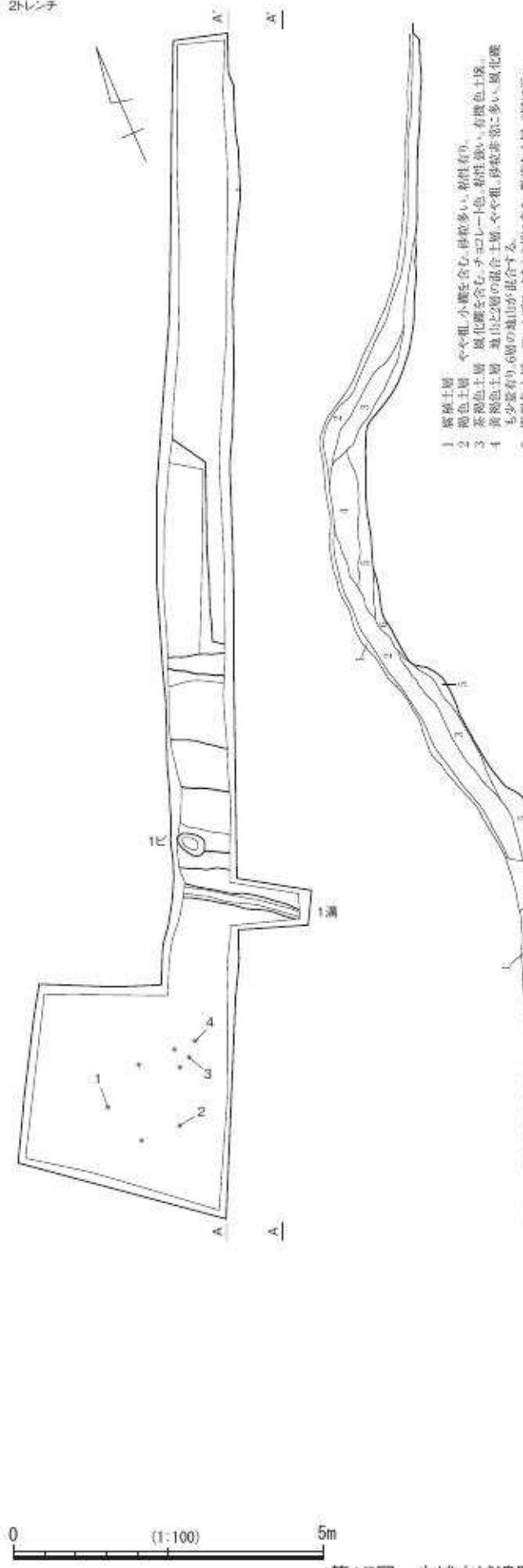


第15図 古城山城跡 1・2号トレンチ

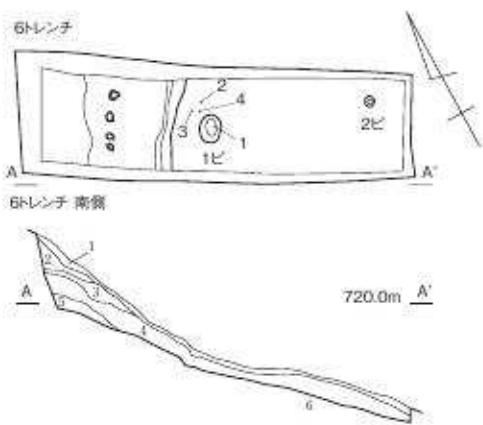


第16図 古城山城跡 3～6号トレンチ

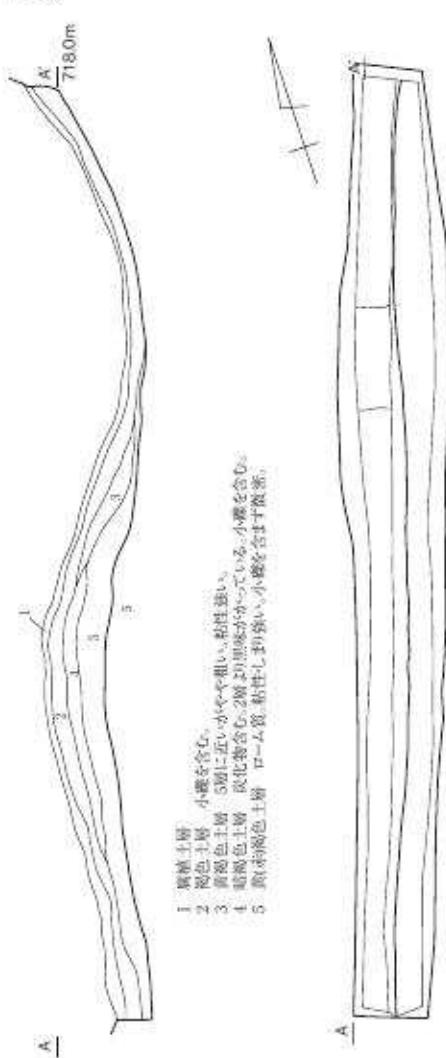
2トレンチ



6トレンチ



アトレンチ



第17図 古城山城遺跡 2・6・7号トレンチ

第5節 古城山城跡の調査成果

1号トレントーⅠ郭内にグリッド杭に合わせて十文字に設定し、東西トレントの西側を北へ拡張した。地山の小礫集中箇所が10箇所程度検出されたが、人工的なものではない。ピットは東西方向に直径60～80cm、深さは5cmとごく浅いピット2本（1・2号ピット）が2.7mの間隔で並ぶように検出されたほか、北端に直径20cmの小形ピットが1本検出されているがこれらは柱穴とは思われない。1号ピット北側に遺物のまとまりがあり、炭化物が60×80cmの範囲で集中したが、浅間社、大我講に伴うものとみなした。そのほかに遺構はない。遺物は、8弁の菊花文を押捺した印花文をもつ陶器甕の破片数点、微細な土師質土器数点、灰釉陶器皿片2点、近代陶器急須1点、文久永寶1点、1銭銅貨（大正9年）1点などがある。4の甕は渥美類似の甕で、13世紀に遡る可能性がある。「国志」にいう瓦の類とはこの甕のことであろう。灰釉陶器皿（1・2）はA-D区からの出土品で、大窯3期（1560～1590）とみられる製品である。武田時代、戦国末の時期を示す資料である。

2号トレントーⅠ郭からⅢ郭にかけて設定し、1号土壘を断ち割った。土壘上面で約60cm、Ⅲ郭内で18cm掘り下げたところ、1号土壘は地山を土壘状に削り出して基底部を整えた上に2～3層の土層を盛り上げて高さを増していることが判明した。Ⅲ郭内、1号土壘の裾まわりには幅20cm、深さ10～15cmの1号溝が2mにわたって確認されるとともに幅広の溝状遺構が溝に併行して存在することがわかった。また溝状遺構にかかるように1号ピットが1本検出された。直径30cm×40cm、深さ26cm。トレント内からは、Ⅲ郭内に微細な土師質土器皿片10数片が集中して検出されている。

3号トレントーⅣ郭内に幅約2m、長さ9mと12mの2本のトレントをTの字形に設定し深さ5～12cmほど掘り下げたところ、地山の小礫集中箇所が数箇所検出されたほか、1～6号ピットが検出された。1号ピットは直径28cm、深さ8.9cm、2号ピットは直径20cm、深さ11.5cm、3号ピットは直径120cm、深さ14.4cm、4号ピットは直径22cm、深さ32cm、5号ピットは直径26cm、深さ36.9cm、6号ピットは直径29cm、深さ13.6cmで、深さ30cm以上を測る4・5号ピットは柱穴とみなしてよいだろう。遺物は陶器甕片が1点出土ただけである。

4号トレントーⅤ郭内に幅2.4m、長さ約14mで設定し10～20cm掘り下げたところ、真北から50°東に傾

いた1～4号ピットの4本のピット列が検出されたことから、西側を長さ4m、幅2m分拡張したが、西側への柱穴の広がりはなかった。1号ピットは直径28cm、深さ15cm、2号ピットは直径25cm、深さ34cm、3号ピットは直径22cm、深さ12.3cm、4号ピットは直径20cm、深さ6cmで、直線的に1.9m間隔で並ぶことから、掘立柱建物の柱穴列とみなしてよいだろう。遺物は土師質土器皿片が数点出土したのみである。

5号トレントーⅡ郭内の南北方向に10m×25mで設定し、7～18cmの深さで掘り下げたところ、ピットは確認されなかったが、礫がまとまって出土している。遺物は石鉢片1点が出土したが、現在遺物の所在は不明。

6号トレントーⅣ号帶郭内に東西方向の6×2mの調査区を設定し、20～80cm掘り下げた。4号帶郭外周には浅い段切りがなされ、その傾斜面上方に礫が4個並んで検出された。また帶郭面は緩斜面となり、その斜面裾寄りに炭化物、焼土ブロックが混在する35×25cm、深さ6cmの浅い1号ピットがあり、その上層付近から鉄製角釘が4本検出された。そのほかトレント東端から直径12cm、深さ25cmの2号ピットが検出されている。1号ピット上層出土の釘は頭を平らに叩き潰した鉄製角釘で、全形のわかる2本をみると、長さ約5cmで、3は先端が直角に曲がり、4は緩やかに曲がる。ピットに埋設されていた柱材と関連した釘と推定される。

7号トレントー1号堀切、2号土壘の構築状況を確認するため1号堀切と直交するように、15×2mのトレントを南北に設定した。土壘部分で深さ80cm、堀部分で深さ24cm掘り下げたところ、1号堀切の底部は緩やかな曲線を描いて1号土壘に連続的に移行し、1号堀切、2号土壘が同時に構築されたことが確認された。遺物はない。

第6節 城跡内の石造物

Ⅰ郭内に総計11の石造物がある。それらの内訳は石祠1、浅間社碑1、藤森稻荷社碑1、富士講闘争碑9である。石祠および浅間社碑（明治33年）は、この場所を富士山の写し靈場とするために勧請した石碑とみられるが、すでに大寄友右衛門が天保10年に古城山に浅間大神を勧請したともいわれ、また山道の途にある小御嶽・亀岩碑が万延元年の石碑であることから、古城山の写し靈場化は江戸時代に遡るもので、明治33年になって再興されたのである。また藤森稻荷碑（明治39年）は富士山五合目中宮の藤森稻荷大明神を

勧請したものである。富士講関係碑には、成就記念碑の明治21年「登岳四十四回大願成就」碑を最古例とし、明治33年の「大我講開祖碑」をはじめ、明治34年「登岳三十三回大願成就」碑、明治45年「登山三十三回大願成就之碑」、大正12年「登山三十三回大願成就」碑、大正13年「登山三十三回大願成就」碑、大正13年「大我功劳真行身信之碑」があり、すべて大我講関連碑である（第14図）。

A（高さ 100 × 幅 80 × 奥行 34cm）

（表）甲斐国西八代郡市川大門村

大先達 今村市平衛

　登嶽四十回大願成就

明治廿一年七月

周旋方 村松大平 渡辺五左エ門 今村□作

　村松忠右エ門 小林常吉 □□□□

　今村十兵衛 一瀬保平 □田定吉

　大原兆右エ門 笠井勘四郎 保坂□□

□□左エ門 □□右エ門

B（高さ 124 × 幅 86 × 奥行 45cm）

（表）大我講開祖碑

　正七位依田孝撰書并篆額

崇信教法之能治人心而深敬愛之志況於神德之守護國家利益人身亦可不謂至明乎大我講者創於大寄兌孝翁翁受教富士北口身祿師之派天保初開之代官山口某而下士民崇信者曰多得千数百人遍於河内領西鷗延及駿河上野翁當謁東叡山法說王得其允許又内外八湖之外特開八池其詠歌者以典雅被賞先是諸講頗多弊害翁為矯正之於是所率益懲乃立祠於故武田氏烽火臺之後稍圯明治中興官欲堯之信徒力請得存焉蓋其能存者雖由大我信徒之力則又非神德之至廟乎今茲夏余遂自東京途過富嶽之北適遭各地諸講來往者察其隆盛懷翁之事頃者信徒來請文感其志篤不辨記之

明治三十三年十一月

　小林伴左衛門鑄

（左側面）

世話人 今村岳行得信 近藤重左衛門 村松忠右衛門
　村松兵行 村松國太郎 大原七郎左衛門 渡邊正行
　小林米吉 渡辺七郎兵衛
深澤江行 一瀬安太郎 遠藤小左衛門 佐野長行 一
瀬宗三郎 今村森作 一瀬武七 村松幸二郎 遠藤□
左衛門 一瀬富吉 一瀬保平 德田定吉 村松芳次郎
　村松満太郎 一瀬柳六 岩崎與吉 保坂文二郎 山
本義吉 一瀬伊之吉 秋山柳太郎

一町目年番世話人 一瀬万太郎 渡辺長一郎 一瀬定
吉 一瀬仁右衛門 近藤藤吉 青嶋勘兵衛 一瀬甲子
郎 斎木源吉 今村孫七

親戚 渡辺信 大寄又左衛門 渡辺有益

C（高さ 99 × 幅 63 × 奥行 21cm）

西八代郡市川大門町

権少講義 村松兵四郎

　登嶽參拾三回大願成就

明治參拾四年七月吉日

　大我講社中

　小林伴左エ門鑄

D（高さ 108 × 幅 61 × 奥行 30cm）

権少講義

　市川大門町 山本松吉

　登山三十三回大願成就

　大正拾貳年六月

　大我講社中

　発起者 市川 総代世話人

　年番 上北町

E（高さ 112 × 幅 63 × 奥行 19cm）

（表） 先達

　大我講 渡邊長二郎

　登山三十三回大願成就

　大正十三甲子年五月

　大我講社中

（裏） 二丁目

　年番世話人

　石工 小林正刻

F（高さ 112 × 幅 71 × 奥行 15cm）

（表）補少講義 小林正刻

　渡邊五郎右衛門

　登山三十三回大願成就之碑

　明治四十五年七月建立

　大我講社中

　小島春波書

G（高さ 132 × 幅 81 × 奥行 9cm）

（表）訓導 一瀬萬太郎

　大我功勞眞行身信之碑

　大正十三甲子年

　大我講信者一同

　総代一同

　二丁目年番一同

　一丁目世話人一同

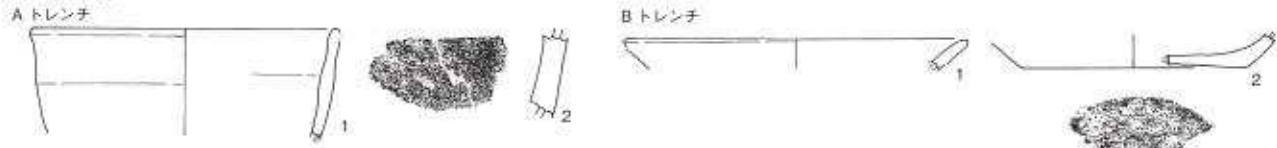
　石工 赤池宗

H（高さ 104 × 幅 51 × 奥行 21cm）

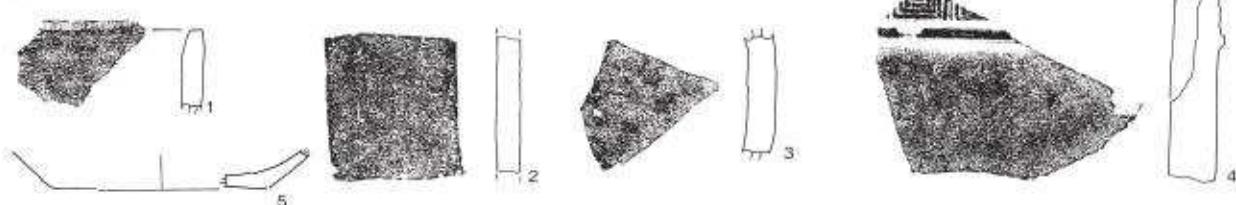
夢窓国師母の墓地点



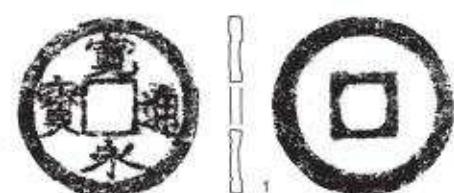
御屋敷遺跡



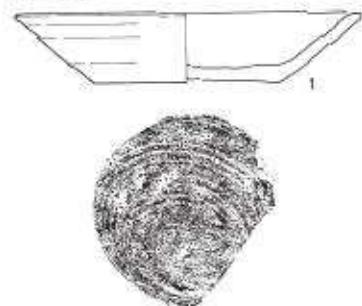
C ドレンチ



H ドレンチ

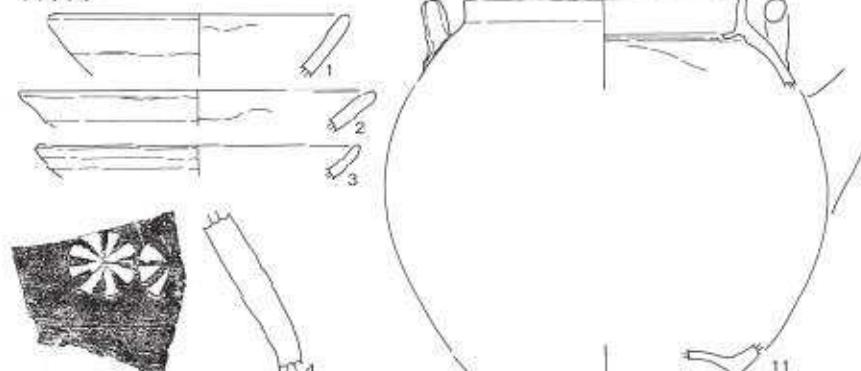


I ドレンチ

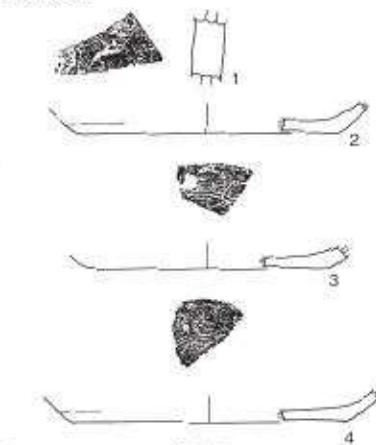


古城山城跡

1 ドレンチ



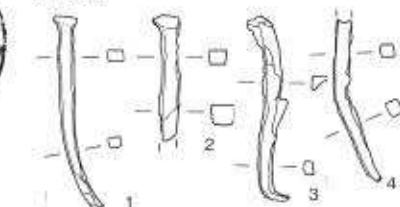
2 ドレンチ



3 ドレンチ



6 ドレンチ



0 (1:1) 2cm (古銭)

0 (1:2) 5cm (金属製品)

0 (1:3) 10cm

第18図 出土遺物

(表) 浅間神社

(右側面) 明治三十三年九月再建

年番壹丁目世話人

I (高さ 82 × 幅 40 × 奥行 15cm)

(表) 藤森稻荷大明神

(裏) 明治三十九年九月吉日

壹丁目登山講連中

世話人

渡辺五郎右エ門 渡辺長二郎

一瀬定吉 一瀬万太郎

J (高さ 37cm、屋根幅 33 × 奥行 43cm、基部高さ 19
× 幅 19 × 奥行 15cm)

(表) 大天狗

石尊大権現

小天狗

K (高さ 114 × 幅 61 × 奥行 18cm)

(表) 権少講義

先達一瀬宗三郎

登山三十三回大願成就

昭和四年六月建之 大我講社中

(裏) 発起者

総代一同

市川 河浦 世話人

年番 大北町世話人

この中で、Aと同一人物とみられる権少講義今村市平衛の登岳四十回大願成就碑が北口本宮浅間神社入口西側の扶桑教境内にある。それには周旋人として6名が連ねるが、Aには登場しない人名で構成されている。また同所にはCと同一内容の権少講義村松兵四郎の登岳三十三度大願成就碑がある。このように古城山とともに北口本宮の両所に大願成就碑を立てる習わしが一時あったようである。

第7節 古城山烽火台跡の構造

古城山烽火台跡は山頂西側のピークにあるが、正確な測量調査および発掘調査は行われていない。前述したように1988年の調査の際に見取り図が作成されたほか、宮坂武男氏が略図を公表している程度である（第12図）。

東西に長い形状をもつ山頂は、長さ 40 m、最も広い部分で幅 15 m 程度であり、登山道から馬の背状の尾根を上り詰めたところにある。主郭（I 郭）とも呼ぶべき最上部のテラスには、東寄りに 4 × 6 m 程のごく低い塚状の高まりがある。西側が自然傾斜状に低平となり、その境は明確ではないが、II 郭とみられる。

I 郭内の盛土部は烽火の施設に関連したものであろうか。また II 郭には西側に古道が取り付いており、郭が通路幅でえぐれたようになっている。この古道は屈曲しながら郭状にふくらんで西方へと下る道で、烽火台への進入路と思われる。西側の道は複数の腰郭状の屈曲を繰り返してさらに下方へと続いているが、明確に腰郭と認定できない。また烽火台の南斜面には、烽火台を取り巻くように巻き道があり、西側で屈曲する古道と合流している。さらに北側を巻くように幅の広い古道があり、西側の屈曲した道と合流しつつ、北西の尾根へと抜ける道につながっている。山道からの登山道があるが、これも進入路であろう。1991年報告でほぼ一周取り巻くようにみえた帶郭については、南北の巻道の誤認であったとして訂正しておく。なお堀切、土星、石積みは認められない。

東側の山頂については、公園として整備されたため旧状を知ることが難しいが、東側に仏岩のガレがあり、これは遠くからでも見ることができる。烽火台跡のピークよりもわずかに高い尾根上の高まりで、現在西端に烽火台が整備されているが、周辺は丸みのある自然地形であり、人工的な削平面などはない。南側斜面には東屋を建てるための削平面があるが、新しいものである。この尾根状ピークを東へ抜けると城域南限の堀切に至る。つまりかつては堀切から東側の山頂ピークを越えて烽火台に至り、そこから尾根伝いに北進して城跡に到達するルートが本来の通路であったと思われる。

第8節 古城山城跡の縄張

古城山城跡の主要な遺構は、中央部分の主郭を中心にして東西約 90 m、南北約 180 m の範囲に及び、主郭は東西約 20 m、南北約 28 m の長方形で南側に土星があつて、南東・南西に土星の開口した虎口（出入り口）がみられる。主郭内には明治以降の富士講関連の石碑などが立ち後世の改変が考えられるが、北西角も登城口のようである。主郭を取り囲む土星は、南側の残りが良いけれども、本来は全周していたかもしれない。

主郭西側の斜面には堅堀が 2 箇所にみられ、北側から東側、南側にかけては、一段下がって腰郭がとりまく。南側の郭の先は堀切と土星があり、その尾根続きの 65 m 先にも堀切がある。主郭と南側の郭の間には、西側に堅堀、東側にも浅い堅堀が入りこむ。東側腰郭先の東斜面には帶郭・腰郭があつて、3 箇所に堅堀がみられる。

北側の山腹には細長い帶郭・腰郭が何段か形成され

ているが、そこから北に延びる尾根筋の先には、さらに小段があり、その続きには西側に低土塁を伴う三角形状の郭とさらに下って3段程の小郭がみられる。また主郭北西方向に派生する尾根の中腹に大きな堀切があり、烽火台から東の頂を越えた痩せ尾根の両側に堅堀があつて、城域を画している。

北側の腰郭・小郭、北西側の大堀切、南側の烽火台、南東端の尾根の両側に落とされた堅堀までを含めると、広大な城域を有しており、このような例は、笛吹市の蜂城跡・旭山城跡などでみられる。

古城山城跡の縄張で印象的なのが山腹に落とした堅堀である。これは韮崎市にある白山城跡の放射状堅堀と類似しているように見える。

白山城跡は樹形の虎口、横堀から派生する放射状堅堀の組み合わせ、主郭と台形状の馬出郭等々といった構造的特徴から「防御の意図の明確な遺構」ととらえ

られ、縄張研究において武田氏築城技術による城郭の典型例とされる（村田修三編『図説中世城郭事典』第2巻 新人物往来社 1987年）。

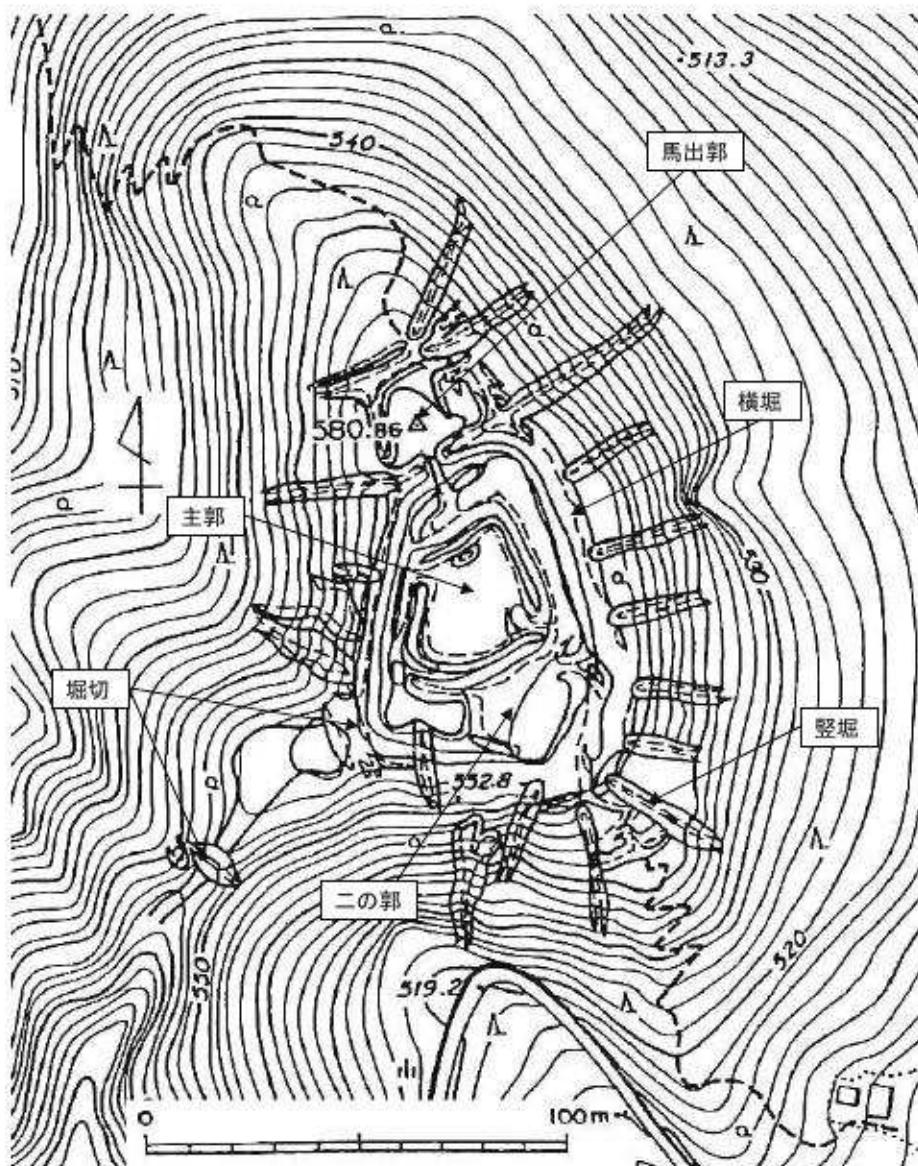
総じて戦国大名の築城技術には諸大名ごとの個性があり、それぞれに独自の城館がつくられる、という理解に従つて、大名の名を冠した「○○系城郭」という概念が用いられ、武田氏によって築造・改修された（武田氏築城技術による）戦国期の城郭や館を「武田系城郭」と呼んでいる（山梨県考古学協会 2001年度研究集会資料集『武田系城郭研究の最前線』、山梨県考古学協会 2001年）。

白山城跡における武田系城郭の構造的特徴は、「(一)一定間隔で設けられた放射状の堅堀 (二) 放射状堅堀とセットとなる一部横堀となった腰郭 (三) 台形状の馬出郭 (四) 挖込式舟形虎口 (五) 「ハ」の字形の堅堀」と整理されている（数野雅彦「武田系城郭と白山城」白山城跡学術調査研究会『白山城の総合研究』韮崎市教育委員会 1999年）。

一方、近世城郭の成立を中世城郭の縄張からたどると山城の三部構成の延長線上にあることが推定されており（村田修三「近世城郭の成立について」『中世城郭研究』第11号1997年）、山頂に土塁で囲まれた主郭、その南に堀を隔てて二の郭、北に帯郭・堀切を画して三の郭（馬出郭）が連なる白山城跡は、1・2・3の三部構成で武田氏城郭の縄張の到達点と評価されている（1996年に開催された第13回全国城郭研究者セミナーのミニシンポジウム「近世城郭の成立について」報告者の村田修三氏の発言による）。

前者は縄張のなかでも特色ある遺構に目をむけたいわゆるバーツ論、後者は縄張の基本となる郭の配置を論じている。

古城山城跡の山腹の堅堀は一見すると白山城跡の放射状堅堀と似ているようだが、放



第19図 白山城跡の縄張（測量図に加筆）

射状とは言えずその長さも短い。虎口についても土塁の開口した平入りで楔形とはならない。主郭を取り巻く帯（腰）郭あるいは横堀は無いなど、各遺構については微妙に差異が認められる。また南北に郭が連なってはいるが、各郭は繋がっており、主郭・二の郭・馬出郭というふうに堀などで明確に区分けされていない。

白山城跡に典型的な主郭と台形状の馬出郭、横堀から派生する放射状堅堀の組み合わせに関しては、4段階の発展的系譜が推定されており（数野雅彦「武田系城郭と白山城」）、1段階：尾根を掘り切る山城のなかで、主郭部と台形状の平場（郭）が堀切で画された構造となり、主郭部に不揃いの放射状堅堀がみられる。2段階：台形状に整形された馬出郭に大きな堀切がともなう。横堀状の帯（腰）郭から堅堀が派生。3段階：馬出郭に横堀状の腰郭が付設され、典型的な放射状堅

堀となる。4段階：台形状馬出部に掘りのこしをもった横堀があり、横堀状の帯（腰）郭からの放射状堅堀、馬出郭と主郭に掘込式楔形虎口が設けられる、となっている。これによれば、古城山城跡は1段階、しかも主郭と台形状の郭が堀切で明瞭に画される前段に相当するように思われる。

主郭からそれぞれに二の郭・馬出郭（三の郭）が画され、三部構成をとる白山城跡に比して、古城山城跡は、主郭南側の郭は主郭との間に堅堀が入り込むものの独立性は弱く、北側腰郭も同様である。さらに堅堀も不揃いで放射状とならず、横堀はみられず、楔形虎口が用いられないといった縄張上の特徴が認められる。それらの相違が築城の時期的な要因によるものなのか、城そのものの機能に帰するものなのか、それとも築城者の意図を反映したものなのか、なお検討を要するであろう。

（山下孝司）

第6章

本書は、旧市川大門町に所在する平塙の岡の夢窓国師母の墓、御屋敷遺跡、古城山城跡の解明を目指し実施された発掘調査の報告書である。ここには3遺跡の調査報告に留まらず、甲斐源氏の義清館跡、平塙寺と夢窓国師、天正壬午の徳川方入甲、富士講の大我講など、町の歴史に関わる重要なテーマであるとともに甲斐国全体にとって明らかにすべき課題を含んでいる。町自体が合併により名称を変え、当時の職員も退職された今日となつては調査担当自身の記憶も相当薄れてしまつた感があるが、改めて遺物をクリーニングし、遺跡を踏査することで当時の見方を訂正する部分や、新たな発見にもつながった。それにしても当時課題とされたテーマが四半世紀経た今日、その多くが未解明のままになっている点については多少の驚きを禁じ得ないが、本書を踏み台として今後に研究課題を引き継いでいきたい。

さて平塙の岡周辺にあたる夢窓国師母の墓、御屋敷遺跡の調査は短期間で行われ、目立った遺構が検出されなかつたことから、下層への徹底した調査とはなっていない。それでも御屋敷遺跡から出土した土師質土器皿は、14世紀代の特徴を示し、夢窓国師が来甲した頃に近い遺物として注目すべきである。類例には北杜市白州町の教来石民部館跡、並崎市の武田東畠遺跡などがあるが、従来良好な資料が県内には少ないとあることから、土器編年上、空白の部分でもあった。御屋敷遺跡の資料もけっして良好なまとまりではない

総 括

が、14世紀代を補う資料として位置づけておきたい。義清館跡の存在を証明する資料としては12・13世紀代の土器や陶磁器の出土がふさわしいが、それらは出土していない。したがつて出土したのは平塙寺に関する資料とみることができ、義清館跡については依然として謎のままといえ、今後の周辺調査の進展に期待したい。

夢窓国師母の墓は、調査当時、文久元年碑の下層を発掘することによって供養塔としての後世の建立を確認したにすぎないが、根石状の集石や古瀬戸片などの存在により、付近に何らかの平塙寺関連遺構が存在した可能性を見出すことができた。平塙寺の天台百坊の所在や分布については明らかにされておらず、土地利用の改変に伴つて年々わからなくなつてゐるが、文献研究者を交えた平塙寺に関する総合調査を早急に実施する必要があるだろう。

古城山城跡については、再調査によって山道を土橋状に切る北限の堀切が見つかり、進入路を南北で分断する構造が判明した。この遺構については、東側にのみ堀状遺構が認められ、登山道のある西側にないことから、山下孝司氏の見解によれば確実な堀切とはいがたいものの可能性が高いとのことであった。ここでは、この遺構を北側を分断する堀切とみたわけであるが、これにより城跡、烽火台跡をセットで防備する計画的な遺構配置とみることができ、従来指摘されているように両者一体型の経営が行われた可能性がより高

またといえる。古城山烽火台は甲府盆地を挟んで湯村山城から府中へと連絡する盆地南側の情報拠点とみられることから、富士川流域の河内地方から静岡方面との連絡地点としてもっとも重要な位置にある烽火台といえ、烽火台の守衛とともにその運営のための施設として城跡が機能したのであろう。同時に本栖方面への山岳ルート上に位置することから、より強固な防禦構造がもとめられたとみられる。

城跡については平面図作成により郭や堀切、堅堀等の構造が明確になり、韮崎市にある国史跡白山城に類似した甲州の特徴をもつ山城ということができ、この点については第7章第8節の山下論考を参照していただきたい。その特徴は主郭を中心に自然地形に合わせた不整形な郭を重ねるとともに複数の放射状堅堀を配置する点にある。主郭（I郭）北側が虎口とみられること、北側斜面に堅堀を設けず連続的な複数の腰郭を配置する点は、北側尾根筋（市川方面）からの進入口を正面とする構造とし、東西斜面の防禦性を高めている。また、山下氏が指摘したように、V郭北方の尾根上、標高650m付近に低土星を伴う郭と3段の小郭があるという。この点については、実は現地踏査ができなかつたため未確認であり、本報告に反映できなかつたのであるが、北側斜面は市川大門町方面へ下る主要な尾根筋のひとつであり、防禦上ふさわしい位置といえる。

発掘調査では、いくつかのトレンチ内で貧弱な掘立柱列が見つかっている。郭内に簡素な掘立小屋的な建物が存在したことを示すもので、そうした山小屋的な姿が甲斐における戦国期の山城の実態であろう。遺物としては戦国末の土師質土器のほか、大窯3期の灰釉陶器皿の出土から1560～1590年代の使用が裏付けられ、戦国末には山城として機能していたこととなり、武田時代から天正壬午の乱の時期の城跡といえる。また13世紀に遡る可能性のある渥美系陶器片が出土した点に関しては、戦国期に古手の甕が用いられたとみることができるほか、城跡の初現を示す資料にもなりうる。ただし遺構の特徴は戦国期の山城としての様相のみを示すものである。すなわち平塙寺の前身寺院としての山寺的な平坦面の配置は認められないことから、城跡以前に寺院関連遺構が存在した可能性は少ないものの、山城の築城で痕跡が失われたとする見方もでき、山寺伝承の存在には一応注意する必要がある。また義清館に対する要害城説は、御屋敷遺跡同様に12世紀代の確実な資料が出土していないことから、とりあえずないものとみておく。

なお、城跡内に林立する大我講の富士講碑群については、昨年、忍野村教育委員会がまとめた富士山信仰の調査報告書に詳細な考察があるほか、また近年、山梨県の世界遺産関連事業として実施された富士山信仰の道の調査の成果があり、富士講碑の石造物調査成果を本書に加味することができた。

最後になりましたが、報告書刊行にあたり、市川三郷町教育委員会には多大なるご理解、ご協力をいただきました。これまで未整理のままであった点をお詫び申し上げるとともに、発掘調査から整理においてご協力いただいた皆様には感謝申し上げる次第です。

<引用参考文献>

- 出月洋文 1980「古城山の砦」『日本城郭大系』8 長野・山梨 新人物往来社
忍野村教育委員会 2015『忍野村富士山信仰調査報告書 忍野八海を中心とした富士山信仰と巡礼路』忍野村富士山信仰調査専門委員会
大町桂月 1914「富士の八海」「桂月全集第3巻紀行」
河西密雄 1989「まほろしの寺か「平塙寺」「峡南の郷土」29 峡南郷土研究会
櫛原功一 1991「遺跡探訪 古城山城址」「山梨考古」第36号
影山正美 1995「富士講碑」「市川大門町の石造物」市川大門町教育委員会
立川實造 1995「石龕」「市川大門町の石造物」市川大門町教育委員会
韮崎市教育委員会・白山城跡学術調査研究会 1999「白山城の総合研究」
萩原三雄 1991「古城山砦」「定本 山梨県の城」
深沢広太 2014「身延町西嶋の浅間神社の石造物について」「山梨考古学論集Ⅶ」山梨県考古学協会35周年記念論文集 山梨県考古学協会
深沢広太 2015「本栖湖と四尾連湖を繋ぐ巡礼路について一大町桂月の歩いた道と二つの富士信仰碑—」山梨県富士山総合学術研究委員会調査部会資料
宮坂武男 2006「図解 山城探訪 第17集 山梨 峡西・峠南・郡内地図資料編」長野日報社
山梨県教育委員会 1986「山梨県の中世城館跡一分布調査報告書—」
八巻與志夫 「甲斐武田の「のろし」「烽の道 古代の通信システム」宇都宮市教育委員会・平川南・鈴木靖民編 青木書店
平山 優 1998「天正壬午の乱—信長死後の旧武田領争奪戦について—」「能見城跡」韮崎市教育委員会ほか



1 夢窓国師母の墓地点（北より）



2 夢窓国師母の墓地点（調査前）



3 2号トレンチ調査状況（拡張前）



4 2号トレンチ内根石状集石



5 2号トレンチ内基礎（旧墓石設置地点）



6 3号トレンチ内集石



7 夢窓疎石母の墓下層断面



8 夢窓疎石母の墓調査風景

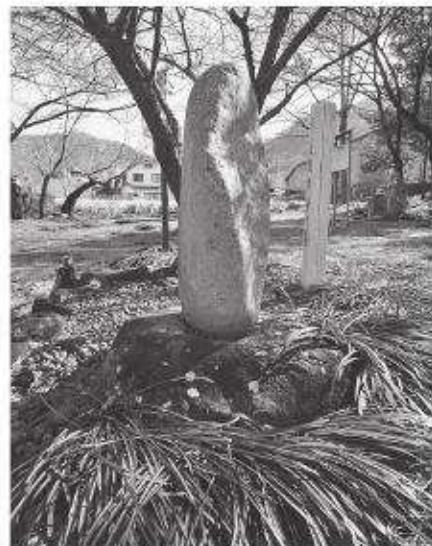
図版2



9 夢窓珠石母の墓石碑



10 夢窓珠石母の墓供養塔



11 同 側面



12 御屋敷遺跡 I トレンチ



13 御屋敷遺跡調査風景



14 御屋敷遺跡C トレンチ



15 御屋敷遺跡調査区周辺



16 御屋敷遺跡の現状



17 古城山（北側より）



18 四尾連道沿いの石龕



19 尾根の石祠



20 四尾連道沿いの小御嶽・八大龍王碑



21 烽火台北側の堀切



22 四尾連道沿い北側の堀切



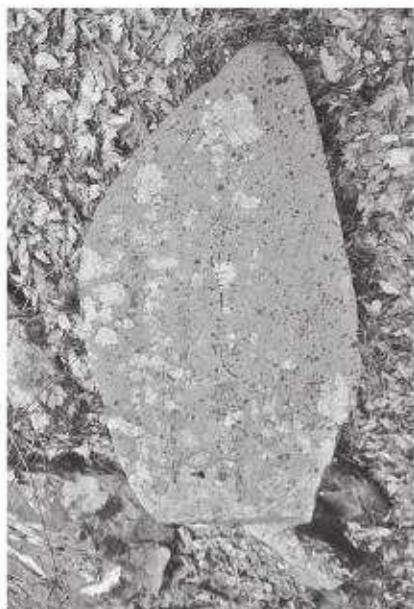
23 古城山城跡 I 郭内富士講碑



24 富士講碑



25 富士講碑



26 富士講碑

図版4



27 古城山山頂より甲府盆地を望む



28 I郭内浅間社の旧状



29 古城山烽火台跡



30 I郭内浅間社の現状



31 古城山城跡



32 古城山城跡 1号トレンチ



33 調査風景



34 1号トレンチ付近調査風景



35 1号トレンチ



36 1号トレンチ



37 2号トレンチ断面



38 6号トレンチ内ピット列



39 3号トレンチ



40 古城山城跡内調査風景



41 2号トレンチ



42 同



43 V郭内水溜状遺構

図版6



44 平塩の岡と熊野神社



45 (伝) 平塩寺跡



46 御屋敷遺跡からの眺望



47 正ノ木樅荷と琵琶池跡



48 夢窓国師母の墓地点出土遺物



49 御屋敷遺跡Iトレンチ1



51 同釘



50 古城山城跡出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	こじょうやまじょうせき
書名	古城山城跡
副書名	やまなしの歴史文化公園整備活用事業に伴う夢窓国師母の墓・御屋敷遺跡・古城山城跡発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	柳原功一・山下孝司
編集機関	公益財団法人 山梨文化財研究所
所在地	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566-2 Tel055-263-6441
発行年月日	西暦2016年3月18日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
むそうこくしは はのはか 夢窓国師母の墓	にしやつしろぐんいちかわみさとちよ いちかわだいもんあさにしきらしお 西八代郡市川三郷町市川 大門字西平塙 6023	19346	-	35° 33' 24"	138° 30' 41"	1988年 7月26日	99.4m ²	歴史文化 公園整備 活用事業 に伴う整 備活用事 業
おやしきいせき 御屋敷遺跡	にしやつしろぐんいちかわみさとちよ いちかわだいもんあさおやしき 西八代郡市川三郷町市川 大門字御屋敷	19436	24	35° 33' 32"	138° 30' 14"	1990年 3月28日	65.3m ²	
こじょうやま じょうせき 古城山城跡	にしやつしろぐんいちかわみさとちよ いちかわだいもんあさべつそり 西八代郡市川三郷町市川 大門字別荘	19346	17	35° 32' 41"	138° 30' 30"		260.1m ²	

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
夢窓国師母 の墓	伝承地	中近世	供養塔・集石	中世陶器	文久元年の供養塔
御屋敷遺跡	寺院跡	中近世	集石	土師質土器・陶磁器	平塙寺、義清館跡伝承地
古城山城跡	山城跡	中近世	堀切・ピット・溝等	土師質土器・陶磁器	烽火台跡とのセット

要約	夢窓国師母の墓は江戸期の供養塔周辺の試掘調査の結果、下層に埋葬遺構がないことを確認した。御屋敷遺跡は中世の古刹平塙寺跡で、源義清居館跡との伝承地でもある。戦国末の徳川方 仮御殿があったと伝えられ、地名の由来とされる。14世紀の土師質土器が出土した。古城山城 跡は義清館の要害とも、平塙寺の故地との伝承もあるが、豊堀を多用する形態から戦国期の山 城であり、山頂の烽火台跡とのセット関係をもつ。山道沿いに2箇所の堀切がある。
----	---

古城山城跡

—やまなしの歴史文化公園整備活用事業に伴う
夢窓国師母の墓・御屋敷遺跡・古城山城跡発掘調査報告書—

平成28年（2016）3月18日 発行

編 集 公益財団法人 山梨文化財研究所

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566-2 Tel 055-263-6441

発 行 市川三郷町教育委員会・公益財団法人 山梨文化財研究所

印 刷 株帝京サービス
